# 玉葉和歌集上

宛平縣文庫

玉葉和歌集巻第一

春歌上

紀貫之

春立日よめる

今日かぞへてはつかぬ人のこゝろにも立かへるとしの春の心を

堀河院の百首の歌たてまつりける時立春の心を

源俊頼朝臣

庭もせにふるさとゝなるもゝとせの初春にはなほ雪ぞふりける

後京極摂政太政大臣の家の六百番の歌合に春のはじめの心を

前中納言定家

春立日雪のうちにあるをみて

初春のこゝろを

入道前太政大臣

あつさゆき春立ちしるしとけぬれば山ぶきのはなのうへにぞ見る

春立ちぬとこゝろをよめる

院御製

春たちぬとゝのふるゆきのうちにはなのうへにぞ見る

後二条為子

春立ちぬすみのゝ月もあさぼらけ日数とゝまる

早春心を

前関白太政大臣

いつしかと春はやまちつゝ雪ぬ

世のうやとをしなはるやとをしの山へたてけるをりをりに
山中春望　うしのふとをとをみ侍し

お大納言為兼

鳥のねもの〻をそれ山ぬけ初る明ゆく春の色のをしさかな

子日　とよなを侍る

小弁

数〻すくをそれ初のひとこえ松のひとをとをしをしの色

嘆義経よしみ〻をきけり百ゑ〻ゆ春

しんと

皇太后宮大夫俊成

ゑの世と聖へよりてそ初ねの松の末と遠よ

新院御製

朱雀院の御屏風に子日小松ひく所を

ひのもとをとをく侍けり　大中臣能宣朝臣

子日する聖へよこ松と見るつまて物の山路よ尋そ

文治六年女御入内屏風

後法性寺入道前関白太政大臣

きふをりの光小をるる姫こ松中務の奥平親王

長歌

ゑ聖へ乃わるふ〻ふ〻

我とする〻ひやの〻ふ〻ゑ聖へよ中小ゑ葉と

六帖をそてをみ侍けり

前大納言為家

[illegible]

禅子内親王家庚申ニ合よりの事と

生雅

書ませよむ〳〵みえわたる事ならへて緑よ成ぬるふ

寶治二年後鳥羽院よ百ニ合をもよけり

常盤井入道おとゝ

同心と

[illegible]

正月ハしめつかた日よませ給

院御製

けり

のどかふるやそとのもりもきゝぶけり八日新ふの春雨

後河院御所百ニ合をもよけりふ歌と

為家卿後

建保二年二月内裏よ給ふ歌ハ

よ聖外家と演給ふ奇と合せ給ふ

杉の音消ぬやいつこ春ハ来ぬ新の聖へい家内ふ

百ニ合ふ中に

後鳥羽院御製

見ぬ人ハ世ハむ新をそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

永福門院

建長二年行方合法師春望と云ふことを
よませけり　後嵯峨院御製

難波江の入江の春のみなとにて霞に
浦の春望と云ふを　院御製

みるめ生る浦路の春の夕なぎに
霞に伝ふ海人の子

春の夕ぐれを

百重なる山のとをちの春の日を
百重に隔てる中にて家を

霞をこめて家まちとる山のとをちの春の夕

西園寺入道前太政大臣
（元実）

湖上朝霞と云ふことを人々に
右馬陽侯基氏

かすみこそ浦まもみえぬ朝なぎに
霞ふるむ三月の

題不知　二条院親王覚助

霞をそ分て山の春とは知る
みすあり外に又も見ぬ

餘寒を乃んを　前大納言為家

はるかぜの山風ふきて未ふ深もなまなほ春ぬ寒

春の中に　法光明寺前摂政太政大臣

ちりぬとも春を忘れぬ花ゆへに
春立とふかりのやどもとめん

守覚法親王家にて五十首歌よませけり

よ吉奇　　野宮左大臣

日新みぬ山こしのよりはるかに雪けの月のあけぬこゝちする

寛治二年百首歌たてまつりけるに春霞

行けり　　前大納言為家

あら雪ふりもやまぬ海ちかきたちまつ花の雲と紛ふ

春の日の中に　　永福門院

行さゆる風に雪とゝのはせて夕雪ふるむさし野の月

雪とみゝ花とやちるゝ雪ふるまつ雲ぬ雪ふるまつ雲ぬ

鶴とゝまれり　　九条関白

榜本人麿

うちつけに去立ぬ我門の柳ぬ雪ふるまつ

雪ふるまつ雲ぬ雪ふる去立ぬ　　権中納言定頼

五百番歌合に春の雪

雪ふる去立ぬ　　皇太后宮大夫俊成

雪と花とや散つらむ雪ふるまつ雲ぬ散つる去立ぬ

正月に雪ふりて鶯なきつるいとまもせず

行けり　　前山院御製

梅の雪と雪ふる去立ぬ　　清原元輔

雪ふる知

常盤ねのときくて長月乃山ほと雪乃下消よ考れ
所首ヶ寺より　　時早雲雪
　　関白前太政大臣

なきまくら世代の長とや常盤ねのなさのなけるん
　　ある〜んと　　法一位教良

岩のきはに雪乃消ぬ〜に光うちとる常盤ねの志
　　百首ヶ中に　　源重之

常盤ねのなく物うきになく〜めつらと物と物よ常やふるん
　　天徳四年　内裏ヶ合よ寄　　中納言朝忠

我宿乃物うえふる〜常ハ風の役よ寄ゝやとあはこ
　　守覚法親王家よ五十首ヶ よ　ま せ ら を
　　時対　　法橋能昭

白雲ハ物う枝ふる〜常ハ寄ふ寄ゝや元ひ出ん
　　百首歌中に　　前大納言為氏

寄乃うちも長ハ之ふと乃ゝ原ハ常の志
　　春ヶ中に　　権大納言公経

うちとひさ長さりて小林ふるゝ小常そ物
　　摂中納言親宗

山里ハうくひとゝ物ゝ今ゝ乃ゝ新の元と長めさめん

寛治百年にすぎにけるかの朔日

寄月院梅宗

なにはがたなみやの宮と云へん

後鳥羽院下野

宮ばしらの時そ山ちかの頃ちをにあふちすす

平為盛

今宵こそ行末しるく宮ばしらさしふるかの

梅宗使公通家人に宮ばしらよませけ

ると宮そ侍ける所に

前参議雅盛

長家あちらてうまとて宮ばしらおもいくれぬ物と云てもや

梅宗使公通

長家朝臣そ物と宮の物もとりとりとりあ

竹間寄と云ことを

平貞時卿下

宮ちらす竹のそ風も長めさて西乃物ある宿ば宮

仮法性寺入道お宮の家百年にすよ寄と

正三位季経

なとさりふ一もしらす長行とねてに出て宮そ物

弘元年百年にすぎにける時宮

左近大将實泰

西そくらめ長行梅の宮てクのとに宮そ

春日の中に　　今上御製

ゆくかはる梅の枝よりのがれさるそこゆ
えにふる雪

従一位散良女

雪のうちにかくれぬるかとけぬ今ぞうぐいすもなきそめてる

二条太皇太后宮大弐

雪とともにふるとはなしと思ひしを梅のそこにはなにまがへて

家より五十年の年せをかけて富と

二条法親王守覚

花ゆゑに梅のよこりをとりて富の木ずゑにかをるそこ

従一位前関白太政

雪ふりて春のはじめの梅の花ちるを

梅とよませ給へる　法皇御製

ちるとみるまでにほひぬるかな梅の花ちるを

従二位親子

春の中に

ちるとみるまでにほひぬるかな梅の花ちるを

貫之

白雪にふりかくされて梅の花ちるとみるまで

源信明朝臣

梅の花ちるのひろまるとみるまでに白雪

つゐ孫

あるをあるとも折りや侍らん梅もいまだ蕾にて雪の
建長六年三首会めされる時梅と題給
ふる
雪ふかき
月よ花ゆゑ思ひ分るとも春くれわたる木末梅もやはらぐ
藤原信實朝臣
梅ふる雪
山里の春人
さてさいつくとあるあしに我宿の梅ばかりも咲ぬとは
上東門院中宮とやまきる時さとり梅を
折てまいらすとて
紫式部
匂ひあの下ふやはらぐ梅ばかりも香とともにふちせ雲上
賀茂社よりまつる百首の中に梅と題給
けり
白たへの袖ふ匂ひよりつるとも梅うえしやうちわかん
前右近中将資盛家会
お中納言定家
折ふ袖ふ匂ひ梅うえ梅もよそうふんふるとも
正治二年百首
春部
後京極摂政太政大臣
梅花すゑ咲しらるる春山の
前大僧正慈鎮
山里の梅のあら枝乃中ふかしそうしまはあとふの

五百番歌合より　後鳥羽院御製

梅の花匂のあるじ誰とてか春の夜の月の雲にかくれぬ

大納言有家

雲ゐ風ふきはらふ空の梅の花にほふ春の月ぞ

賀茂重保卿

雲深み神さびわたる梅の花ちりてもなほ匂ふなりけり

二條院讃岐

梅の花遠き里にぞ匂ふらん

権中納言長方

梅の花ちりぬる春の夕ぐれに匂ふ風にぞ春は知りける

二月の比宮内卿の梅つかせ侍りしのりとへ侍りしに春はいかなる所にか梅はいとはるかに侍りしかとも

梅の花匂ひを宮にうつしてぞ春の夜の月

返し

よみ人しらず

春の夜の月にうつしし梅の花匂ひをとめて春ぞ

家の梅さかりなりけるに

和泉式部

見るかたにちらぬ梅の花ぞ春の夜の月にうつしてぞ

春の中に　　順徳院御製

山ざくらの頃の梅の花さかりもうへ出やうたん

庭梅とふことを　　長山院御製

あらぬ匂ひとちらす梅うへの花の庭に春風

枝枯たる梅に大臣よりかくの給ふ歌に頭注

ひらめて林のとしひくふなりて人こゝよ

みの給ふ　　源左忠朝臣

たをもかもしらぬ春の梅もこてひとりふるさとの

もふ知　　大納言藤人

宿とに梅のもちる久堅の雲のうへまでみつまて

ちりのこる頃ねぐらの梅うへふ常なきぬ春のくれ

所前の中に　　中務宮親王

梅うへの花のもよ家あらて匂ひのこれる春の花

家よりの合一　　紀時春

前大納言為兼

梅花まさりあるのうらの人の言て柳ふりさて春の花てふ

百首の中に　　永福門院

春の雪ふりて梅の子すの緑聖ふとけて春の花ぞ

紀貫知　　信二位家隆

あさみとりそめて春風ふくからにみたれそめぬる糸そ千す緑なる

千五百番歌合に　寂蓮法師

何なれや佐保山の鳥のねも柳の糸は春ならぬ
花しらす　坂上郎女

うちのほる佐保の河原の青柳も今は春へとなりにけるかも

人丸

春風にみたるゝともし我宿の柳のいとはいとつなけり

右近大将道綱母

我宿の柳の糸はなかくともくる鶯のあしをしもかなん

夕柳を　後二条院御製

のとかなる[illegible]の山はみとりにて霞にまかふ青柳の糸

春曙といふ心を読侍る　従二位兼行

いつくの霞をそこの千す緑あけて柳のいとにかゝりつゝ

百首歌中に柳を　前中納言定房

はかなくもおもひたゝれぬ玉柳は春風のをつなきにけり

二条院御時内裏にて禁庭柳といふことを

皇太后宮大夫俊成

とし

春ことに玉のみきりをてらすかな柳の糸やとりのやまに

賀茂の社に読て奉りける百首歌に柳

玉柳かけてもしらぬ枝なれと見とりの糸のなつかしき

寛治二年八月十五夜百首歌たてまつりける時路柳

ときはなる世にはなれけり　後鳥羽院御製

玉鉾の路なりふるしなれてそうつる色柳

あらぬ柳とうつるなを　後恵法師

流るる色にうつる河原柳　木ゝもいろ〳〵玉藻かな

春風とよもせはなれ　院御製

山のもとにうえてうゑのゆ雪ふるすゑのかはかぜ

春日社に百首たてまつりける時春雨

雨にそうつる雨やなにうつらんいとゝ雨の山はなる雨乃雨

参議雅経

春雨と云ふことを　九条右大臣女

はるゝ〳〵と春日のとけき雨すみの岩そこしき

夕春雨　院新宰相

なゝ世に言ふ春の雨はるゝ雲ひまのたゝめる

つまゝと雨ふりくれて春日八つ〇ゝ永き物をそ久

久安六年崇徳院に百首たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成

なゝめすゝみ（つ）ゝ雨をもとゝ雨さゝ雨そふる

五十首の中に　後鳥羽院御製

春雨のふるとは空にみえねときけはさすかに軒の玉水

春日社にまゐりける百首歌中に春雨を
よめる
皇太后宮大夫俊成

春雨はふるとしもなくみえぬ柳の門は緑のいとよりそ

春歌中に
前右近大将公経

雨ふれはなこりもみえす朝明の柳の糸にみたれし露

前大納言為家

あさみとり柳の枝にかゝりてねさめの玉の春の鶯

帰雁を
大納言経信

故郷とおもひなれつゝさそあれて秋こそ帰る雁のつらなれ

宝治百首歌奉りける時同じ心を
花山院前内大臣

春霞たちしかくせは帰る山こえゆく雁のみちはまとはし

粟田口家歌合に
賀茂重保

帰るさはみちよりさきに玉章をことつてやらてそ帰るらん

霞中帰雁といふことを
前参議雅有

明ぬるか田面の霧ははれけるも山にわかるゝ春の帰雁の群

後京極摂政家に百首歌合し侍りしに
雲雀をよみ侍りける
前中納言定家

末とをき若葉の芝ふうちなひき雲雀鳴のゝ春の夕暮

五十首の内に　後二位藤隆

あさゝよりあとをとゝのやうふこゑ月をもとの五の内の

雑うた　権大納言

なつのつま恋ひよりあさり雲雁なれぬ

春の宴中に　源順

うふこゑをそなつの雲にあさゝ雁のちるを

見しらす

人九

雲井聖ふんやうとゝ出にしふ春の夜

春日遅く　獨時難天暮

左宰相武言遠

独のこなるむら宿雲井月八ほを書うれ独をそ

建長五年二月三首うめされ行々の内

初雲　前大納言資季

あるよいまう雨ふん内うさ河とゝ雲井ゆ

内侍と　入道前太政大臣

う方にうるゝひ乃ふをあゝ雲内の弱よれ雲遠

西行法師　をゝめ行をう百ゝ宮中に

おの中納言定家

あさなきよゆさふ舟の音をまて雲とうふ浪の上

前内大臣

いにしへもありてむ人和田の原霧を分てよすみ渡れ

春月を

中務卿宗尊親王

山のはをそこともわかぬ霞にも出る春の夜の月

入道澄散

うき身にはいつともしらぬ涙にて霞をたとる春の夜の月

権中納言定頼

くもるらん見やけさよりも中々にすめる空の月とそ見え

従三位親子

雲もなき春の夜風の吹たてにかすめる月そ猶霞ゆく

法皇御製

なかむれはそこはかとなくかすむ夜の月に春の空そなれ

嘉元二年百首歌めされける時同じく

入道前太政大臣

春はたゞ人もこそとへ春の月梅にほふ宿の風にまかせて

建保四年内裏歌合

前中納言定家

なからへてわきてさくらの花のもとにまた春かすむ月

百首歌の中に

前僧正實修

難波かたかすめる月のかけのみそなほくもるかとみし淡路嶋

待花といふ心をよませ給ける

院御製

しられねと人のそてや春ふかき時のうつろふと花のまつらむ

花よいつか春日うらゝに世はなりて山の霧よりあれなく

花の哥よみ侍ける中に

西行法師

山ふかみ花咲へくもあらなくにきりあまるまてこそ見られけれ

おなしくはいつまて山の岸よりかほるとも花の咲つらむ

永福門院

本しらぬ花ちらし時(ちりきし)ならぬ世はすくれとも春風そふく

世をそむき侍けるに　八条院高倉

行てみむ今は春ふる里の花の錦もたちもこそふれ

春哥中に　従二位家隆

花盛やよそにまかせて山もとのほのかに嶺の白雲

あかぬこゝろのうつりて残りける百千中に

入道前太政大臣

山さくらや花のさかりのしたをしも山本さかる雲の上かな

玉葉和歌集巻第二

春歌下

五十首歌の中に　院御製

山桜の散はてまゝの咲ぬれば　雪をぬきてふるとみるかな

初花と　前関白左大臣

大方は散のこりたる花もあれ　春の一木は雪をあはれと

花の中に　中務卿宗尊親王

みるとせしゆきをぬきて咲ぬれば　春をしる山の初桜哉

祝部成仲

山あゝとあさかの雲とみえつゝ　雪のまゝふる桜なりけり

同人百

雪やとも咲そめぬれば桜なる　花の風とぞ云ことを　前大僧正道昭

ちらしてはまつ枝の残はあまゝ　雪はよそにぞ春はゆく

見花と云ことを　従二条院御製

ちらしてはすゝて白雲の　雪にあらぬ春の山

花の上　権中納言定頼

春の錦とぬれる花桜　雪の袖やそちぬらん

雪つもるとぬれる花見人　ぬれて

西行法師

花見にとむれつゝ人のくるのみそあたら桜のとかには有ける

修行し侍りける比よ花さかりなりけるを

みてよみ侍ける

なかむるに花の名たてのみなりけりすゝ木のもとことにやとる春さん

もなしとて鏡なく　權中納言公敏

行過やなくて山のもさくら志賀の浦風ふくとしもなし

正治二年百首歌に　式子内親王

とふ人もなしとて鶯のなくねをつきき宿のさくらを

春歌の中に　永福門院

なかむれは山はさくらのさかり聲は霞に鶯のこゑ

山花

山階入道左大臣

春霞おやみもたてる雲かとも山桜よそにてもみん

山家もと　尚侍藤原親子朝臣に

都には雲とやみえん我宿のあたりにちかき山の桜を

俊恵法師歌林苑月次歌に

源仲綱

咲ぬれは花とをみけしや白雲の山をかさねて立のほる見え

千五百番歌合に　西園寺入道前太政大臣

行さきとたつねてみよしのゝ山桜さえ志らぬ花咲にけり

暮山花を

前中納言定家

角もたる雲のなかふかき宿うす紫の花の末

紫ふかく

たつた山なかの花ゝ霧ふかき

花のちりふかき日西園寺入道前太政大臣

たてしらんせしかくる時ふませおくりける

春山院御歌

春毎ふるさとの梅ゝうちかをりえて数のうちもみえぬ

霞をりゝ木ゝ忘毎ちるひと梅柳枝よ咲ちるそなり

紫とさしてゝ人ゝ行ちまつりけるふ

春路とふるとを

院御歌

みちのへや木の下ちるやらひよ結んもの宿や蕭

無陀よ結ゝ河宇治前関白太政大臣

ひの花見ちらしゝ宮て中老しけ

選子内親王

ぬりかへ毎つねる毛ふあれちの花毛ふ毛あ数

返ゝ関白よりうりてよみ給ふ

堀河右大臣

風とてゝ山へ花ゝ数つゝ忘ゆ毛ふしとゝ

遍日看花とふ

桜花ちるを見て

白河院花見の御幸に侍りける

前大納言師忠

大宮おとゝの大臣

おもひこむ事ふる日にしられぬるかな花の色にうつる

思花日暮と云ことを

梅為仲朝臣

桜花散りにしうつる今日をまた月まつ頃となりぬるかな

平忠度都下山里に花見侍りける家つゝ

しおゝすやとゝまつ人にたゝしてはなをいかゝ

とゝまるべき桜ちるてゆゝしき

なけきをつゝみて侍けるに

小侍従

我為ゆゑ一枝の桜ゆゑ

法金剛院花さかりに上西門院御ともに

いさなひて花見侍るに思ひ出て侍る

といふ心をよみ侍りける中に侍けれ

法橋顕昭

ちりぬるやうゝ心ものなくなりぬ一本うゑし日をとゝ

花とゝ侍けり

権中納言長方

ものをこそ思ひ出ぬ世とゝ侍るに春にあはでみるとも

花のもとにあまたさふらはせ給て風吹ける日
よませ給ける　花山院御製
木のもとをふつくろはして桜をもちらさしとこそおもひけれ
題不知　二条皇太后宮大弐
いかにまたまちくらして桜をもみかへしもなちはんとすらん
中務卿具平親王
みかきよのことしもことはりまさしもそちるなき
花の中に　清輔朝臣
老らくのこゝろやまはなれん人にそへてあかぬ花哉
三月はかりに人のかたへまかりてもとめて

よみ侍けるに　祭主輔親
わかめつゝみまくもあかす山桜我のこゝろは遅やは
題しらす　贈皇后宮懐子
春ことにあかなくしてき花をものゆかりはゆきてみるへく
人の家にたちよりけるにやよひのついたち
は花乃盛にゆかれて人みなとてよみ侍ける
前大納言公任
あるしとおもひなしてそまちわひぬもあるしなら(とて)
も有とて　院中務内侍
年をへてかくすむ宿にもかれ見んはるとしめつゝしさは

院御製

春の中に

前大納言為兼

ひとめもみぬ花ぞさかりの春の色

権中納言為兼卿

散ぬるかぜ花をさそふと思へば

新院御製

一とせよりはまさる春の色

花ゆへ春の中に

新院御製

春の中にいつふ数をつくして

摂政左大臣

関白前左大臣

内裏にて花をさかりとさそひて人々に歌をよませ

つかはす時花を

をりをりにあまた梢をみる時は花の盛は程なくぞ

永福門院

散りぬるをみちゆきぶりの春ごとに世をみる花の盛とぞ知

光明峯寺入道前摂政関白左大臣

しら世ぬきの百首の歌をよませ

前中納言定家

鳥羽の御家のうたとて

三条右大臣

よとともにひとりぬる人はいとをしけれ春見ぬ秋はなし

いそぐまてゆめとみはけり

中納言通輔

櫻花白ふしてゆめ
ゆめ
櫻花白ふしてゆめ

三條右大臣

立てりしもそ秋のくれ
ゆめ
櫻花白ふしてゆめ

新恒

櫻花白ふしてゆめ

小式部内侍

雪とのみ櫻花散りてゆめ
雪とのみ櫻花散りてゆめ

花さそふ嵐の庭の雪ならぬ
はなさそふ嵐の庭の雪ならぬ

菅原孝標女

里とはいとあまり荒るる山路ゆゑ
櫻花咲ぬる都とをもはいつくもあらじ

前中納言通房

櫻咲ぬる都とをもはいつくもあらじ

お大僧正花憂

やへ匂ふ花と昔はいふなれど
櫻花咲ぬる中に

順徳院御製

みよしの山のあなたに櫻花人はいとはぬ人やみるらん

花十首

みよしの山のあなたに櫻花人はいとはぬ人やみるらん

小山花

なるあやぶるものの山へも毎年花の匂ひよかるべき二月の空

花前とて　　従一条入道前関白左大臣

今は世をこえはてぬる方ぬる山のくもとしたうん

老らくの春ぞ物のあはれなる花をあふぎて日ふる涙落

前参議雅有

ちるこそまさしき山桜はなる一本をいとふ春

花原為守

守覚法親王家五十首歌

河橋とつらねけり　三源入道前太政

春歌

春ぞ物のゆくへ定め桜ちる山のいろそ色こそあはれ

文五百番歌合　　西園寺入道前太政

物のゆくへ花ちる雲のなびて桜よ色むすぶ山

従京極摂政太政大将家歌合に春曙　前中納言定家

合し給ふに春曙

家ふる色ぞ雲のよりてそ色ふこりしる宿の春

曙花

永福門院

山ぎはの雲ぞ物のなびて色むすぶ色そみる

従二位為子

おくれ先にこのとぢてる春ぞ物の匂ふ曙

法二位親子

春動のころと侍りける　永福門院内侍

ながらへの花のかりそめやみえて世の常なるそのなごり

夕花とふことを

近衛関白前太政大臣

霞まて春ふかくなる梅を再そひてうすくさかりをそうつす

花の宗秀

なつかしすあるを匂ひも狂をひくかまはつ花の

山花と

前太政大臣雅孝

ひらひらと岩根の梅はひらけるに家も忘るる花のなかへ

花山院中に　春山院御製

山のはに月のかたふく夜の末に梅ちるそとの

〈道前太政大臣

冥土なる花のかりかりの夕附日霞て春の山

春宵中に　式部卿門院御歌

あくるまのまてに花をみる春の山路やとをみうの里

家に花盛りの内の房さそひくる世の春に

大納言二位の世にそこして結ひけるとさ

りなる春中にて結ぶれい語くつりけり

関白太政大臣

嵐のさそふ花ゆゑ
道一

散てもとまるとそ思ふ
暮山花と云心と

立こめる霞の内の山さくら
前一位

雲ふかう日数のいろもうすく
五十番歌合ふかく九条右大臣女

月ふかき庭の梢の一本のこ家のこれかの夕月夜
建保五年四月廣申の春夜

前中納言定家

山のはの月まつ空の白雲にもえそめしかの花の色
為兼家の歌合

花ちりし月のすむ秋の夕ぬれ
前一位

入逢の鐘すむ山の陰にまて花の木ぬれし月ぬれ
春月

おもかけとはなれぬ月の
後法大寺前右大臣

散花日暮と云とも
開日おなし改右

[illegible]山橋月出を見てみえわたる
源氏信うあるに二年に橋あり名をさも
あらにしりてくさそひて見物に行はれと
なく言て月出よりそなはなのくうたよみ侍
けるふ

平貞時卿下

二年に新の光りとそてやうすまていつる春の月
毛思侍りるに秋はいとりいとなる柳
の枝と折て糸のりとおかといせて侍れ
し

城河右大臣

あめのさもとのくもりみふるまとひとりぬる春柳の糸

冷泉院春宮よりはつ[illegible]きる時百[illegible]
しけ中に春宮　重之

[illegible]春のさもふりもとのもくさんと思ひけるか

山路花

西行法師

ちりそむる春の初雪ふりぬまいふこうしけまられ[illegible]の山
[illegible]人に行けり時[illegible]よ百[illegible]
中に

後法性寺前関白太政大

横咲[illegible]風や海[illegible]雲[illegible]

春宮中に

前大納言為家

山ふかき岩吹の[illegible]春風[illegible]

落花と

常盤井入道太政大臣

雲とのみ雪とのみ散る桜山桜いつまと花の名をとうらん

前右兵衛督為教

さそひもて花の梢は吹風のうつりぬ宿をおもかさ

左京権大夫俊言卿

庭の面にふりしく雪とみるまでに梢もそまれ散る花

入道前太政大臣

雪の中に

白雲は散るかと見るまで消ぬ花ちる山の峯は雪せ

権大納言房實

ちるかとも見るまでさそふ花の枝はいとゆる雪せ

躑躅

躑躅

里人のみるかりそめとおもふ花桜はまさりぬ

よみ人しらず

見しかとて

桜花のさかりぬるかとうつりぬるを

相模

花ぞ散る春をなきやの里に桜はさかりすぎぬるか

長治二年三月中宮花合の次よみ

仲実

中御門右大臣

九重ふかうつりてせいふ桜梢や昔の人よりまし

前参議教長

躑躅

躑躅

枝はおもくなりぬ春のくれ　行きき新樹代

花と

西行法師

うき世をうらめばかとも春風のちるをもとはぬ情なりけり

月前落花

ふるさとをまもる桜けり

坂冷泉院御製

春風のすめる空に月新しく新の色はあらたなり

新しき

源光行

散つり庭は光とうつるとも月ゆ新の袖とけまし

春月と

常盤井入道太政大臣

みよしの山の月は花園せふけはゆりしかりの春風

嵐とも思はまほしき光はなく庭は勝新の月

花前

祐盛法師

春風はふと思ひつるやとしをさそひ新の行さとも思へば

百首の中に

前大僧正道玄

春ごとにちるふ嵐のうらもなく世をうらめしく花をみるのあ

花ゆえまもる風の

武部王親王

閑中花

武部王親王

我身世をふるとともなれなれてあはれなるてうる春風はものちるん

お中納言定家

題しらす　平兼時

梢より嵐吹おろす杣川のいはほを越る花のしら波

津守国助

庭の面はうつもるらむ方遠み嵐よりさそふ花の白雪

西山に住侍ける法師のさかりに前大納言為家人々つかはして歌よませ侍けるに中より詠侍

世の中は逢りつゝすとてかさそへ侍ける

蓮生法師

さひしさや宿にしつまぬ雲井まても待雲わかへるまてちるなとは

花歌中に　前大納言為兼

さひやかにならへて花の香の世をの一きりにかすみのこらぬ

前中納言雅顕

み吉野の山のあなたにちらさしと吹すさふ風のあまりまてそ知る

家の桜の風によせけることをよみ侍ける

花園左大臣

をしと思ふ花の心をさそふらむわか梢ふかさそふ風かな

延喜御時御屏風　躬恒

春雨よさそてなかるゝ桜花いつまてとかは人はみるらん

雨中落花　前関白太政大臣

[illegible]

春の夕中に　　永福門院

[illegible]

花と[illegible]を[illegible]　　法皇御製

[illegible]

永仁元年三月内裏にて[illegible]

山路の花　　左近大将實泰

さのふの尾上の桜[illegible]

[illegible]百[illegible]夕中に　　前参議政[illegible]

桜花散りぬ[illegible]

春の夕中に　　前参議為相

立ちぬ[illegible]桜と吹風ふまつるを山桜の那

吹[illegible]嵐の庭の木の下小一むら[illegible]花[illegible]

[illegible]　　お参議家親

[illegible]　　大江貞廣

春夜心を

風は[illegible]の面影[illegible]

守覚法親王家五十[illegible]夕中に　　九条[illegible]女

清輝朝臣

花の中に

大納言經信

春風乃山花毎に吹こせい梢しみえぬもそ哉

前参議清雅

久方の花と猶ふる春風に散ぬる雪の心地こそすれ

重保卿

のどかなる今日の光に鶯の哭こそ雪の風に散ぬる

平經正朝臣

猶ふるは

二条院讃岐

ちるそらの花の風をつゝみすもとわすれぬるかな

二条院讃岐

なにはつの浦に立る春霞とうちなびくかと見えつるかな

中務卿親王

ちるとのみ花のみ見しかとの中

家中將

つゝしけり

いふせんみふりやとふる梅まちる花の哭そ哭

同家中將

返し

ちりつもる哭そ哭とも山桜さそふ庭とそ作哭

小式部内侍

花よりは哭ふみる哭つゝりて

赤染衛門

花とそ見ちりぬるかぬ哭と哭と哭と哭つゝ

題しらす　　　よみ人しらす

み吉野の岩きりとほすかく雄もとかくれぬ山のせに

西中殿庭と云ふ事を　　従三位為子

咲出る八重数そふ風ふきねまして桜かさねの表西の庭

春の中に　　民部卿為世

百よのゝ桜はちりまつ本よりもかへて咲山吹の花

基俊女

表西よねましく松の今日も井手の山吹花をさく

冷泉院乃表宮とやけるの時八重

数そへて

壬生忠見

八重よりもみえつる山吹の九重ちりへ

賀茂社へよみてたてまつりける百首の中に山吹を

皇太后宮大夫俊成

桜ちり表のけゆく梅ものも忘れぬ山ふき

暮春心を　　前大僧正仁澄

花はちり鳥は八重なる陸を行く山吹はいてゐありけり

前大僧正道玄

ちりもちる色ありおほてふとかまくに暮の表

平宗宣朝臣

とほかおもしかゝはもる名残よつきてたゝ表

今はとて桜ちるとは吉野山　西園寺入道前太政大臣

蓮基家

花鳥はなほ名ぬるを白雲の　花の雲はいかせて方もなし

やまひの比忘つる梢あるとは海ゆて安産　権中納言公雄

けふとはしらんして

基とてやゝ山河名ぬるはいかんあるとの本もむ白雲宿　院御製

蓮基面と云ことを　前大納言公基卿

ぬまてはる春の下を霞ぬ基やしくの夕蓮宿

延長八年三月廿つかて春宴せさせ給　醍

けふ　源公忠朝臣

名ふるく白雲春のもかふのこりもくるさ基とそ人

紅葉ふ知　赤人

春ふるもしらぬ雪八河名ぬ吟ふ付ふ　大中臣頼基朝臣

花白ふもちりのこるむしなつ形むむ海基ん　春宴ゆて

暮基ゆて　右京亮成邦

もくら風ふつくに匂ふて基とふの花もひてゆく

なを三つ花の花ふも基ふ月八七年ふ基乃ふ　玄蕃頭門院右京大夫

古今和歌集序

（道前太政大臣）

春と立てふたつの花を春ごとに
咲かせてふたつの花を見るかな

章義門院

春と立てふたつのうちを春ごとに
咲くやこの花の春のこころ

千五百番歌合に二条院讃岐

梅ばかり花とはいはじ春の来
れば咲くべき物と思へば

暮春雨

成子内親王

春雨ゆ咲きはじめたる梅の花
二条院讃岐

二月ばかりにまかりて

二月の十日ばかりにまかりて
ものがたりしけるに

従二位頼政

春雨のいとやはらかにそそぐ
なれば梅の花のいとはるばる

従二位為子

なるべし

春雨のいとやはらかにそそぐ
なれば梅の花のいとはるばる

百中三月晦

春雨

院御製

春雨をたりのつつみに雲ふかし
春日社へまゐりけるに百首の中に三月晦

乃ゝと

宝治百首 定家卿

年をへて春はさかりの花の色を
おなじこころに　前大僧正行慶

春のすゑ方になりて鶯の声をきくやまこと
やうにもの思ふ春にあはんみ山
　　お大納言為兼

めぐりゆく春にあふとも思ふこころ
はなのもとにぞ　　

玉葉和歌集第十三　二

夏部

　　入道前太政大臣

首夏のこころを詠ぜられける　　
　　

新緑のあらはれ方より春をへだてし
　　皇太后宮大夫俊成

更衣のこころ
いつしかとかはりはてぬる花の色を
　　前大納言忠良

橘のはなの袖と立ちかへてこそ
　　

夏の中に　　式子内親王

春はなほ雨ふりかぬるうぐひすの

[illegible]中に大井川　望月左衛門尉重成女

大井川君ゐるこゝやく去年ていこゝ成家よりそこ[illegible]

[illegible]ゐるこゝに[illegible]月一日に

つゝ[illegible]　周防内侍

[illegible]ゐるこゝ[illegible]

四月百首[illegible]

[illegible]　流御製

[illegible]

[illegible]　常盤井入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]中に　永福門院

[illegible]

[illegible]　前大納言公任

[illegible]

[illegible]　お大納言為家

[illegible]

[illegible]　前参議為教

[illegible]

[illegible]　二条院親王[illegible]

時やいろ深くもてまつる月を見て
為兼家にて月次の会つかまつりける
外記と　　前中納言定親

月新しくみえて夜半ばかりの庭よりいづる月
郭公とあかつきの　　源道潤

時鳥いづくぞとのみ聞くかな
延喜五年内裏にて
屏風の中に
　　躬恒

我こそは人にまさりて時鳥
待郭公　　常盤井入道前太政大臣

時鳥いまやとのみ山のもとに月をまちつる
　　権中納言公雄

人にまさる山時鳥なれば
夏の中に時鳥　　前大納言為氏

月をまちつる山のもとに時鳥
権中納言兼季卿
時鳥なくなくこえぬ
　　お参議實俊

人とわく情なりけり時鳥
待郭公　　前大僧正道潤

なきあへき雲井をふまとりて今やと待む時鳥
　　星時鳥　　権大納言通重

山里に打ちつゝさうを時鳥初はつこえ
　　夕郭公　　章義門院小兵衛

今あるとあてはめし時鳥村雨ふる雲井の
　　三首ともに時鳥　　院御歌

ふるあつさ夕ぐれまとはしまとさてあるの時
　　郭公　　後人丶歌

あるかなしかまくれまく時鳥ふるかなしかるまつ
　　人丸

くもりあるかなしに時鳥卯月山ふり行なくらん
　　月前郭公　　永福門院

時鳥卯月の空にて卯月の頃はなつかしの月を出る
　　百首の中に　　泰綱雅経

思ひそめて雅なさうむ時鳥一聲とさ聲の
　　夏哥とて　　平敦時

なとさりふまつ人ふれ初めて秋ふ来て秋ふ時鳥
　　重之女

給とれい山河雲をくだしとれ給へ梶原そこく

中納言行平家方合戰

頼人不知

河雲ぬれぬとさしいんを空にありそ浦にくだ

ぬる秋よおきてさうすい河雲をつなぎとめ給へ

夕郭公云ことを　西行法師

置ちりて色そうれ河の郭公ささうほうて南こゑの光

置よ給ちる袖の時鳥とえふむこさうにうる者

う間よまりりて拾なきけりとをうて

周防内侍

いとうとなさうとうを河雲をうてそ給へりれし

河雲をうて人よつうりけり

大武二位

いかりの社ちうを祈ぬ我い報をうしれ

と人て頼給へ河　夕時鳥をふと

源頼實

梅花山こうそやさうつ河雲ゆふ者てのこ賀武こゆ

人てあまうとしるひて郭公歌よ者て給へ

小河除文れ下腔とうりうこうひさて

つうとゆけ也　藤資王母

今もりの宿にて侍りし時
五百番の合ふ　宜秋門院丹後
郭公すきつるかたに雲ゐるかなと出る月を
ながめ侍りし時　郭公とふことを
九條右大臣
時鳥あとに残りてすむ月
雲居にいでぬ　式子内親王
郭公鳴つる雲とながめやる
郭公を　平宣直
わすれがたみの山ねとのみ侍けるより
院新宰相
郭公なほ
道因法師
一声の山ぢをもつれし郭公
仏見て近き郭公
皇太后宮大夫俊成
あくがれにとりふ仏の里にそてしひかりを時鳥
寛治百首の内
常盤井入道右大臣

とりふさくへしらつまゐ時鳥しとこそれ教へかなくなり

なるしらと　　式乾門院御匣

ゆくらひに参らそふ時鳥我にかくらふと忍ひね哉

平照時

時鳥雲井いつくそ村雨のまゐ日わかのよそへの一声

夏曉といふことを　前大納言為兼

月残るね覚めの空の時鳥さらにおき出て名残をそ見る

題不知　藤原宗緒

五月まつ花のかほりに袖しめて雲をかねは日数へる雨の中

五月雨日数ふる菖蒲ふくとこそまあつ

平経正朝臣

あつまやのかやかのねにもあやめ草さへおほえつのふきもなくかつなおる

菖蒲をよみ侍りける　権中納言公雄

今日ことにかやめかりそふきさそふ軒にかそふかみのころゆたる宿

後三条院みこの宮と申ける時菖蒲のね

めしけるにまつりて　弁乳母

君かへき岩ねのあやめ見るたにれからへもことさくへなき

百首歌の中に　後鳥羽院御製

あやめふくやかやかのきにかせ過てほとるまなかつらむ

後鳥羽院に五十首歌奉りけるに

家月て

志つふくあやめ乃上忍を便そてすゝしきや軒のあやめさへ

正治百首歌奉りける時

二条院讃岐

あやめふく軒ハ涼しきゆふ風に山時鳥ちかくなくなり

後堀河院御時五月五日といふ事を

こともによませ給けるによみてまつり

ける

前大納言為家

みさふきも玉江乃あしの軒まてつゝくけふのあやめや千世もひくらん

後鳥羽院に奉りける五十首歌の中に

宜陽門院越前

営みとて小町乃片山へいそくにいそくもしつのを乃田子乃もすそ

早苗とるを待けり

従二位家隆

時ひとは誰かいひけん山里もさや田子乃なるへとそ

前右近大将家教

を山田にゆつみちの一むらやまとりのゝ早苗ならん

夏歌とて

源具朝臣

とりさなへおりたつ田子乃もすそもふちや早苗も今いそくらん

袖五月雨といふとも

藤原隆祐朝臣

ゆりそもしそれの原の五月雨は浅しま草

百首の中に　中務の宮宗尊親王

五月雨いとまもなくふる雲のうち山のたこそ見えぬ

五月雨と　大納言實家

ふり雨いとさしを河と成ぬれて外面の山田をみるかな

前大納言為家

ひるまもとうつる山田ふりとまて雲もはれぬ五月雨は

五月雨いとはれんとやまとる山のたにはれぬる雲のすゑ

百首の中に　後鳥羽院御製

今上御製

難波江やあまの苫屋の苫縄のうちもとをしく五月雨は

夏河とて　前大僧正慈鎮

山里は雲ふる時もいとさらに人の五月雨乃は

庭の面を雲にてふる紫塢の花ゆまあと五月雨の

お中納言定家

五月雨は海未ふりて大雨川とて我乃数をしる

五十首の中に　後鳥羽院御製

松人のとゝまぬまに流るなり水の河原は五月雨の

中務卿親王

物とあてなきみるあやめとうらんひの庭門乃五月雨の比

平経正卿

五月雨よりはまたいまだ春深の世さいまだ宿と海邊つを

心家五月雨と云うつを

新人とりやとふてまつの門雲ちうつ五月雨の元

百首歌中に後　前中納言定家

いとうふ雲かう山の松ほ葉乃時そとちうさ五月雨元

新五月雨

晴やらぬ雲ちう新ふりはて月夜ほ乃ち雨乃元

平宗宣朝臣

五月郭公と云ことを　右兵衛督雅孝

五月雨のとれかう新ほ時月とりふや山と出らん

正治百首歌中に時

前大僧正慈鎮

五月雨ほ雲乃新乃時鳥雨ようりて新乃ふ乃

夏歌中に

能恒

五月雨乃月ほ乃ふ乃新時鳥こゑやふとふ

関郭公と云ことを　二条院讃岐

五月雨と新乃ふ乃とあよ時鳥宿ほ乃ち

治承乃比ほみ侍る百首歌中に時鳥

梅の花ちる里は庭の面より山河なるしらゝとそゝふ

同じくと　　入道おとゝの大臣

あらしものやうとゝく吹る我よ昔はとゝゝゝゝん

簷梅　　右京の道明寺

五月雨の雲吹はらふ風よりは彩の色色

高橋と題を給はり　　亀山院御製

三位はよりのつゝまれ紅梅やいまゝうゝん

檜中納言師時卿合せ給ふ梅を

白雪と云ひと　　郁芳門院安艶

とゝゝゝ吹ゝゝ風の白ひゝゝ花梅のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

延長六年内裏屏風十二帖の内に作り給ふ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夏河

大江宗秀

夕やみ[illegible]

友原俊言朝臣

物[illegible]

法皇御歌

夏山中に

夕附日[illegible]

前右衛門督基房

おもひ[illegible]

入道太政大臣

出[illegible]

夏月遠行[illegible]

前関白太政大臣

さ[illegible]

夏月[illegible]

従一位散良女

[illegible]

友原信実卿

[illegible]

源俊平

[illegible]

関白前太政大臣

風そよりて木ぬれの月を漏るさい松原あるに山陰のそ

建仁二年合せ歌 水路夏月

月影を夏の秋とうらいつるこのゝ風涼しみの白波　皇太后宮大夫俊成女

文治中に

夏の秋に月まち宿のまもりて明ぬと告る月てまちかな　後二位親子

ゆくさゝとひと云へいとむ横雲にやそまさる雲の朧月　後三位有忠

ムラさめ過ぬ夏の月の雲ぬけて雲の朧月　院彩宰相

数を火とゝみ給けり　前摂政太政大臣

月をまちすむとは侍しそまてい燈ふそそのよ燈火　入道前太政大臣

この夏の燈とゝ思てをはまを来てさゝ夏の燈火　夏の中に　女房右衛門守女

やゝ夏もしらなさ秋の雲ぬの光と月まそ　永仁二年五月内裏五首歌　小野宮夏月　お春殿雅有

夏ふかさ空の雲ぬを消てあらゝ白雲の白雲

守覺法親王家五十首うたよみ侍せ
ける　　賛延法師
かさしてす五月のさ苗とる雲にうれぬ星の宮
影しらす　　長撰法師
あるうちのいさらの宮もいさらにあまの海人を
袖ぬらす　　宣旨
第村の宮にうたよみ侍りしに
五百番うたあはせ
ゆふ雲の風にうつるあきの月　惟明親王
雲の宮にうつるあきの月

後鳥羽院御歌
影ふるさ月の光よりやまもとをてらす雲の
叢間宮と云ことを　二條入道左大臣
吹風にうつるひとすの葉はあるまあ家や宮ぬ
　　　

行ゑやむ半はおゆミふゆ鹿の風さへなつさ友ハ車

ゆくすゑ雲ゑ雲あちのうりゆくうゆ立ゑ立ゑ雲ゑ

前参議家親

夕立はれおいつり入庭ゑ日はしさゑぬうゆ

順徳院御製

ゆふ立のふるとはなしに山のこえて思ふ〳〵庭ゑ

法華堂前関白

寛治二年百首中に夕立と

日とそゑふゆ〳〵はゑ蝉の鳴ゑ

入道二品親王尊助

山ゑ雲ゑ消ゑおき風立て苔ゑ雲のうゆ〳〵ゑ立ゑ

前首座人〳〵ふめさし〳〵河遠ゑ夕立

院御製

風ゑ雲ゑ一村雨ゑ過て山みえ初ゑ夕ゑ雲ゑ

九条左大臣女

夕立ゑ風ゑ雲ゑ雲ゑ雲ゑ雲ゑ雲ゑ雲ゑ雲ゑ

行路夕立

右兵衛督基氏

夏ゑ人さ法ゑ〳〵ゑ雲ゑ〳〵ゑ雲ゑ〳〵ゑ雲ゑ〳〵ゑ雲ゑ

前中納言定家

夕立の雲吹はらひて山のうへに海の上に晴
渡りたる月のてりそへる照日山にかゝる白雲
光明寺に入道お拾改家百首の中に夏

源兼氏朝臣

くてゆく蓮はとゝろかぬ夕立の日影あらしとそなる

夏の中に

前大納言為兼

枝より初日の影はさしそめて深くさかゆく蓮の葉

民部卿為世

白さすは蓮の葉の間よりなく蝉の声ぞ涼しき

右京宣成朝臣

蓮の露はらはぬ中の夏山の木の葉にみをて照る月影

院御製

百首歌の中に蓮と

こゝろ引る池のうちの白蓮かうさ葉の玉とうゝ

守覺法親王家五十首歌中

夕作はゝ池の蓮葉の玉ゆりもふる風の涼さ

三条入道太政

樹陰納涼と

河風のふきもふせてゆる陰に涼しくゆる柳葉

源仲正

夏祈ふ

大僧正行尊

みな月のてる日とゝへと我宿の松風ふけは涼しかりけり

納涼

摂政前太政大臣

夕されはみひろ木かうりに松風吹

入道前太政大臣

秋ちかき雲の松風をとゝもゆる山もとしる岩の下水

夏風

摂中納言兼季

夏山のみねの木ゝを吹ちらす夕立の風の袖の涼しさ

昭慶門院一條

風吹とゝもに夕暮の木の下を行すすしき

夏山霧

後光明峯寺前摂政太政大臣

山はそゝふへりけり山霧の世さとも松のさとこけ

夏の中に

前右近大将公房

松ゝ木ゝ木ゝたてさふる岩ゝ間ゝ隠ゝつゝふる川の水

納涼

大江宗秀

岩ねつゝふる苔の庵よりて涼さゝる松風の山

五十首の中に同心

お大僧正仁澄

夏の岩ゝ間ゝさゝつゝふる苔の庵ゝ涼さ

夜ふけて　平維貞

さまりあ木下ぢく澤山路に秋を深るなり

前大納言家雅

岩門の月さやかなるよ山下風を松にふるなり

お大納言有房

吹風の行ゑもあるよ秋さめ神そ時雨

高階成朝卿

もみぢ葉の散さく森下蔭に秋ぞ深ぬ神なび

法印賢守

松風とすさまじさかな吹ぬ岩門の

法印圓伊

もみぢ葉を庭のまゝ敷ぬ神よ深ぬ

後二條為子

風の音に深さ知るとあるもタ山ひの岩下ち

三首ゑ撰せ仁仰付ら時御歌と

院御製

かりふのゝ友とゝ鳴るや澤つをしかの鳴のもゝ色

式子内親王

ちよふまて岩りゝあ木ぬ苔さけい深ぬ神なびの家

正治二年百首に

月のさとに秋ちらしとやさ雨そそぐて西うさに萩のおとろ子後

五十そ首の中に　後鳥羽院御製

秋ちらき三つ頃村の茅村よなふとも忘れ出ぬ忘

建仁二年三合に草野秋近と云ことを

前中納言定家

新しき秋の新を出さて都やいく西の蓋

六月晦の日とさて人〳〵こ所にまり

けつ次に池色紙添とふるを

院御製

萬の葉に一葉乃始を聞て今ふ添池の色

六帖題ふ〳〵人〳〵こ所にまり者に西

乃ふ〳〵　法二位為氏

風ふ〳〵池の波の夜〳〵乃蓋ひて神て添ふ

秋ふ〳〵ん　如願法師

夕日に入ぬ山ちふ河ふ澄つ河ふ霧

玉葉和歌集巻第四

秋歌上

七月一日暁の空をながめてよめる　　従三位親

たのめおく空のうらかぜ秋の来ぬ山里ならぬ初萩の心をみせけり

前大納言公任

いとゝふく嵐にしをれ山里は松ふく風ぞ秋をしらせける

入道百首歌中納言定家

今朝の秋は吹くる風を玉ぐしの袖に初て秋をしるかな

弘長百首歌早秋

前参議為相

初萩の露とぞ見しを玉ぐしの袖に秋をしるかな

衣笠前内大臣

道助法親王五十首歌

信實朝臣

残暑心を

おなじ心を

前大僧正慈鎮

秋あさきゝ日新しき夏ハのこれとも雁ハ萩ふく風
百そゝ中に物ゝ　前大納言為氏
月はゝて吹ゝ海さへ日吹のゝ夕雲ハ秋ハ立つゝ
初物の心を　後一条入道太政大臣
吹まゝ風ハ海ゝ山ゝ葛ハ葉のうらめしく秋ハ来ぬ
弘元四年法皇御所ゝ内ゝ時秋
ゝ　後二条院権大納言典侍
ゝて海ゝ深ゝ色ゝ雲の森ハ出ゝ秋ハ初風
色ゝ　宰相法師
物ゝ思ハ人ゝ心ゝ海ゝ山ゝ雲ハ秋ハ来ぬ　前大僧正道玄
人ゝ心ゝ日ゝ来て家ゝ雁ゝ秋ハ来ぬ　後代ゝ和歌ゝ秋ハ来ぬ
早秋の心を　常盤井入道太政大臣
秋ハ来て今日ゝ月の雲ゝ心ゝ新ゝ秋ハ来ぬ
物ゝ思ハ海ゝ山ゝ月ハ秋ハ来ぬ　法二位親子
五十番ゝ合ゝ秋ハ来ぬ　院御製
秋ゝ来ぬ草木ゝ秋ハ来ぬ　弘長百ゝ首ゝ秋ハ来ぬ　前大納言為家

久堅の雲ゐのうふ彩ゆ天津星合の秋をそなれり　平為時

同人

ひさかたのつまこい衣ことひに神の斎ひ世祭の神を

長山院より出りけるセクメ宮の中に　安部の俊宗

ゆふ付つるあまの河原より秋立て彦星と海を渡る

元巧奠乃心　入道前太政大臣

逢の面ひそたむ琴ねと雲ゐふうす彩の松せ

彩ら寸　山上憶良

ひさかたの星のつまむ人ゐ出て天の河原より雲ゐ

天暦元年七月七日うへ御ものこもしにうゑ

せ給をきけ次よ　天暦御製

逢海の辛ふれをそ天川まれそうゑ世まゐ

織女を　花山院御製

あ逢のくゐふ乙七夕ひとひまたのこの

七月七日よみ給ふ　馬内侍

ひとりのみ河原をうらむ逢ぬ夜の雲そ

長星ゐまれ行ゐわ逢ま天の岩戸ゐ立ふりそ

守覚法親王家五十首の中に七夕

大僧正行尊

[illegible]秋はなほいまだ[illegible]

[illegible]百[illegible]

野宮左大臣

[illegible]年ふるとぬぬ七夕の[illegible]

秋の中に

二条院讃岐

[illegible]織女の涙の[illegible]秋の一夜

平政村朝臣

[illegible]河院百[illegible]に

後鳥羽院

七夕の[illegible]袖の[illegible]

織女よ[illegible]

小侍従

[illegible]秋の七日[illegible]

天徳三年九月庚申の合よ萩とよめる

けり

藤原元真

萩の葉よ風[illegible]

秋浅(あさ)とふ[illegible]

後二位家隆

[illegible]浦ふ[illegible]

[illegible]

院御製

嵐よ[illegible]

早秋の心を

常盤井入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]

式子内親王

[illegible]

恵慶法師

[illegible]

閑中秋と云ことを

法二位為實

たまゆらの秋のこゝろもたゆたへて

[illegible]

秋夕を

永福門院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

萩をよめる　　山階入道おほ大臣

うゑおきしまがきの庵の時雨にぞ萩の葉色を染めまし

従一位散位女

なかめやる沢の日数の積りにうつりかはるこそ萩の末葉

章義門院

ひさかたの雲ゐまでかよふ夕霧にさそはれ萩の花

中納言家持

高貴寺の秋萩こそ咲きにけれ鳴く鹿の音を聞くにつけて

屏風の絵に荒野に女車のかりわけ入る萩の花

立ちとまりて行く末

ひぐらしの鳴くなる時は萩の花

前元関白裏百首

ちまたの風のおとにうつりゆくさかりの萩の下葉

草花に

前参議為相

うへにいま一ときさかりの色ぞ見ん萩の露のうつろひ

秋の中に

二品法親王守覚

ふるさとの色とぞ見ぬ萩の葉の変ずるのちの露の

百首の人々に

院御歌

萩の葉の変ずるのちの露の

院御歌

なびき初る萩の末ら露ちりて萩の葉白き夜の秋風

〈道助法師〉

物こゝろ月の光をうつりもてゆく庭の萩の露の玉

前大納言為兼

露をりこす萩の末ゝふるひをみて吹こゝろ風の色

寛治百首歌

白露をこゝもとてゝ白ふる萩の秋の今さらの色

後鳥羽院御製

山里のかさゝ萩の葉の移ゆく秋ぞ露の玉

お大納言為家

秋萩の花咲ぬらん宮城野の末葉の露の玉ぞ乱れ

たゞ一ゝと

大宰権帥為忠

ま萩原露ふるゝ月の光をもふり初ぬる庭

遠郷萩と云ゝと

皇太后宮大夫俊成

山里はまよゝ花ゆゝ行ゝ萩の人よみをゝ

万葉集の詞にて二百首ゝゝ詠ゝ侍ゝ

ふるゝ

従二位藤原

秋萩の花ゝや露の分て咲よゝゝ人ふるゝ

風吹草花ゝふるゝゝゝゝゝ世ゝ

新院御製

秋とてもいかなる風の吹ぬれば萩の葉ごとに露のこぼるる

永福門院

ふかりつる風にまかせてこ萩ちる上に面影ぞ立

守覚法親王家五十首歌中に

前中納言定家

置ぬまで問てとゝまるなきぬれば萩の面をもとはぬ秋風

光俊

玉葛原ふかぬ秋風ふくごとに大聖の萩の葉ぞちる

秋風の日ごとに吹ぬるる事は聖の秋萩ちぬれば

よみ人不知

萩

基俊

ちるとて花の色ぞ残るべし聖原の萩葉ちるとも

笠金村

ふる雨

高原の聖の秋萩ちりぬるてん乃ちるべかりに

高原廣世

ぬれまこひよ庶ら山の秋萩は露置もむさりるに

大納言猪人

わかなの秋ときの花風とてこ萩へぬれん人をふ

露とのこ伝

前大納言為兼

所首ゑめさしれ　河草花家

後二位為信

うしなふと聖人の子孫なれ共花乃上ゝ色さやうの秋白家

秋の中に　　お右近大将二郎

ゝゝ家も情そふきゝ百年の花のひとゝゝ朔旁を

大江貞重

村雨ふる日新よ秋年ふるの、家や深てかゝん

前大僧正實兼

月のう家まゝ消ぬ物あけの秋まゝ乃もゝ

花原行俊

うそゝと雪ふ物を乃世郎もゝれのゝゝと立ゝ

後一条院御河上を新殿上人　堀城聖の花

世ゝよゝて問ゝ咲りまゝりて行ゝ中宴

乃ゝゝゝ面いゝん所のみゝ世郎花の枝

とさゝれゝゝをゝそゝ見行ゝ

堀河右大臣

一枝の花ふゝにあゝ枝と聖人乃姉とゝりしやゝん

世郎ゝと後を行ゝ　崇徳院御製

乃ゝ人を行ゝて所ゝよひゝ家ゝ世郎花の

西乃ふゝ日世郎花ゝ付て人ゝゝゝけゝ

秋の西よりなほ行く女郎花
亭子院の合に女郎花と

中務の卿平親王

しらみ人しらぬ

白露の玉をもつる秋のとも
撫子野の花見よとてこそ行け

清慎公

こうちゝ折りそすす女郎花
女郎花の露の玉をけつとてこそあ

中務

なつゝ秋といふ心にて女郎花の露をうたん
西園寺にて人々に仕へける秋の山の中に

永福門院

おくふかき庭よりなほ女郎花
光一らす

刑部卿敦輔

名に秋の野べとは花ぞ咲ぬる
ゆふまぐれすとも色やさき

中原師貞朝臣

月影のいる野に落ちのこる
山のこずえに鳴る虫の声

原為

入道前太政大臣

撫子のふりにし京乃むかしを
落ちとゝまりて物思ふらん

千五百番歌合に　大納言有家

たちのぼる山の峯に靡く雲の絶間
百首歌中に　権中納言定平

花落ちしきぬと思ふに吹風の
秋風と　従三位親子

まき柱ふるきにおもふ風は遠方の月
雲間の月中に　永福門院

千歳経る松の葉に遠く雲おくれる白雲
家とのみ世にはけり　新院御製

雲さへ我袖の涙に濡るやあらん
朝霧とのみ行く　入道前太政大臣

入のこる雲に月は消えて
久しく百首歌中に　暁滝郭

うち人の笛の音聞しも
十首歌人々に詠を給ふ時　順徳院御製

松風はいとゞ吹るゝ秋の夜に
三笠山月遠近の秋風と云ふ心　中務卿具平親王

吹ちらすとみるまで秋風の彩を契合せり

権中納言兼季

秋宮にて

永福門院内侍

ながめこそ雲の色なれ秋の暮

百首歌の中に

後鳥羽院御製

紫にいろこそ深けれ秋の暮

秋はてぬ雲の色にも神や祈りけ

建保四年十五首歌の中に

前大納言為兼

秋の色は雲の風の中にきえすもやとに為て弥

大納言有家

夕暮は雲の風の中にいそぐ秋風

前内大臣

雲の色は秋の下葉を吹ちらす

友原義景

秋の色は雲の下葉を吹ちらす

前関白左大臣

雲の色は秋の下葉を吹ちらす

前内大臣

雲の色は秋の下葉を吹ちらす

源清兼卿

雲の色は秋の下葉や深つらん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宿らくつまらふ廉は都のそら妹のねぶかなとなりな

廉のねもおのへは絶もたゆむ波いつくも妹のねぶかな　　友京永光

妹はなの中に　　新院御製

聖しるも妹のうまへやひとりかを廉素とし出るかな

世首なりしの野廉　　後三位為子

夫国の聖や秋さむ乃家ゆ[illegible]ふ[illegible]と廉　　後一位為敬

明廉の急れるへもひとりひそるさたふ[illegible]ふすの京

秋ふとて　　友京為徳卿

家ゆとふ木れるさをすの聖の尾花の中に廉

賀茂社へまりけり百そ[illegible]の中に廉と　　望月后家大夫後成

嵐吹まふ乃萩よ廉ふるさて乃ひろ[illegible]ふ秋の山里

前右近中将資盛家ゆ合よ同心と　　大夫入道関大臣

萩乃葉れそとも出やさ乃ふ言に廉のねとさへ[illegible]

千五百番ゆ合ふ　　大納言通具

あそれるゆもと妹のねぶかつまらふ廉の[illegible]

蹴と

前中納言定家

[illegible]

太御門院御製

たゝ山路や鳴けて[illegible]蹴は[illegible]すゝ[illegible]月そ[illegible]

秋の中に

西行法師

蹴のはと[illegible]ことあてさそふ月も洗ふ秋の堂

光明峯寺入道前太政大臣家合歌 八月下蹴

藤強門院小将

田家鳴蹴と[illegible]

前大納言伊平

建保四年内裏百番歌合

加賀門院越前

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はるかんと　　法二条院御製

秋風のさむきを聞きて雲に吟ずる初雁

　　伊勢

ふもと雲ゐ雲ゐのかぜ初雁のなきこゑあるものそ

　　重之女

きりのうへはれぬるよ雁金ぬるこゑに春をいのる

正治二年百首歌奉りける時

　　式子内親王

我門のいなむら風よおとろけい雁ぬるこゑ初雁の

　　法一条入道太政大臣

秋風に雲ぬけて吟ずるこゑ初雁の

　　五百番歌合　　前大僧正慈鎮

こゑもらす初雁の玉章にさはる物は波の音

百首歌中に　　中務卿宮尊親王

下葉ちる柳の梢うちふきぬ秋風の色に初雁の

　　藤原定家朝臣

二条太皇太后宮大夫

雁のおさちる末のうら波今そ雲より吟ずる

　　前中納言定家

山のふもと雲ゐ吟ずる風より乱て行く雁のつらぬ

　　お大納言為家

秋風や日新しかる村雲と
ちらしさ夕附日うつる雲に初霜の
百千の中に　院御製

雲ゐ秋の空より秋風の
秋ぞとて　永湯門院内侍

ちらしもあへぬ紅葉の夕暮れ
しらくも雲の空ゆく秋の月　従二位親子

紅葉の色はさむしふる夕暮れ空に
冴ゆる月　永福門院

建保五年九月家より妹三位よみ給ける
よ雲間なく　光明峯寺入道前摂政左大臣

夕暮れといはぬ方をさそひ来て雲に
百千ちよみ給ける中に　従二位行家

雁ゆくこゑもかすかに秋風の
日吉社へ参りける百千の中に　皇太后宮大夫俊成

神垣まこもおりしき秋の雲
影しらす　人丸

[illegible]

院御製

嵐の山越て[illegible]

延喜十三年十月尚侍藤原[illegible]滿子宴

賀の屏風の内に作りて[illegible]

つけの中に[illegible]

貫之

[illegible]

[illegible]

檜大納言長家

秋の[illegible]

中務宮[illegible]親王

五百番合に二条院讃岐

春の山[illegible]

[illegible]

大江家[illegible]

[illegible]

藤原實文朝臣

[illegible]

月前雪

民部卿[illegible]

秋はつるとて　　朔平門院

なさけなくとのりせぬ虫の音に人をもせぬ秋の夜

妹和歌　　永福門院

ゆくまはるあまの苫屋のねやの夜の夢をふるしき

月前虫と云こゝろを　　今上御製

月をこそ風にたぐへてさむき秋の夜の虫の音

秋はつる中に　　廣義門院

月をまつ新みんとあぬる夜の離れぬ虫のねとのこそ

ゆきをゆけハ虫の聲のこゝ第に滿て多くの人ふる秋のよもの

院御製

秋星よ行けり七条の后宮上ちりふる

久しくまいてぬまの虫をなれやゝ苔の聲

もるあへしとのくまのせゝりけり行過

伊勢

松虫をあさやゝあぬ秋の聲ふるさとをとゝむ

もゝ

和泉式部

虫の声乃忘ふりあつる秋のよハ義よ物ハ悲ゝ

あひ去りて行ゝ人乃ゆゝ　みよ行と愛て

暮ゝ去りけるふ庭の第ゝを見ゝ義り

て虫なきそれハ　西行法師

分ていう袖よ蕎とけよとて家をきて庭よ出さんそうく

[illegible]

平通時

鳴出乃声を聞もてさこゑ夕風海の畫の萱ゝ

出とゝみ行けゝ　稙大納言公敦

家いをさ風ハ身はむ夕蕎と夕の河ゝや出の鶴

[illegible]

湯原王

夕月秋ん夕のふ白家乃夕をこゝ庭よ蕎ゝ

人丸

第ふゝこさりゝ夕ゝ鳴者ゝ萩みゝ夕ゝいゝこゝまゝ

妹ゝゝて

友原敏行朝臣

夕出ゝ忘ゝ行ゝ物聖ゝふり捨ゝ家ゝ袖ゝ

高弁上人

蕎ゝと我とすむゝ秋ゝ家ゝ松の風も出ゝ

出とゝあゝ

西行法師

秋の秋とひとりや鳴てあゝさまゝもゝふ出の秋ゝ

前右兵衛督為教

鳴あゝすゝゝゝけと蕎ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ世ゝゝゝゝゝゝ出のゝゝゝゝゝゝゝ松の夕蕎

ゝゝ乃秋のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てりけるふ虫とよのませ行けり

法皇御製

聖へふとわり松虫乃なくなりもなき極と志らやこゝ

同人と

さりゝとはね覚し床ととしわふるさて枕の下は死

権僧正慶源

ひとりさい我宿ゝ虫なる庭小虫の志ゝ

秋の中に虫

入道前太政大臣

暮ぬとやゝふけの草夕日くれ乃影よりゝ

安芸前司大江

星をゝ聖中に霧乃下草にくるゝまゝゝ松虫志

春山院より百ゝゝゝめさしけるに

安芳門院四条

ゝゝふかむけ乃風と吹ゝてゝゝゝゝ牧を当

霧とゝみ給けり

入道前太政大臣

を当乃いるゝ牧なき吹風ゝ乃果とゝゝゝ秋乃白露

妹尉中に

有原光俊朝臣

病ゝて山風さむ牧の田ゝゝ乃病ゝ村雨乃音

前中納言定家

萩乃葉ゝゝ乃風の秋志ゝやて聖ゝ志ゝ霧ゝゝ

稙妻と

院御製

ふしのまもむら雲つたふひをみそめ山のもみぢ葉いろまさる

玉葉和歌集巻第十五

秋二十下

題不知

天智天皇御製

ながめあかしてよもすがらこそ月をまちいでつるかな

百敷の大宮人はいとまもなくおほしめしそ月のはやけさ

五十首歌中に八月

院御製

まくさ葉の露はかたみに光をそへて月の影をまちえぬる

月の中に

法一位良教

山のこと葉やらぬ夕の影みえて松のこずえにいさよふ月

常盤井入道太政大臣

くるまぬ山ぢの行末を吹風のかをるに出る梢の月

信實朝臣

ながめあけて山のこしの国の中に枕そばたて月を待れ

前大納言為家卿

百首の中に

従二位家隆

久堅の月そさやけき京極の大宮人やあくるなるらん

順徳院御製

嵐山月

つまもとをとをく人のかよひつる星まをたどる秋の三月

百首の内

中務卿宗尊親王

高砂の松の梢の夕嵐に松のこずえの月ぞかたぶく

月前雲

従二条院御製

嵐吹尾上の松のこずえゆ山とをる月のかげ

家集

ながめ侘て月の影のはるかに

平貞時朝臣

ふるさと

秋の夜のなかき程をや彩らん出くいそぐ山の月

従二位花宗

影ふる知

雲ゐ山ぬとふ乃みをの嵐に桂の葉ゆひさいつる月影

大江貞廣

山りの上にて聖は木陰まもりに弓をもむ岸を月出る程

従二位宣子

しみのゆうる根乃月いと高き時て山かたちさやかに秋雲

月出る空の中に　永福門院

空さえて月乃のゆうに山風のふきはらひて消る雲乃一村

右寺月を

従二位為子

さらを山橋乃ゆう嵐強の秋の月小夜ふけて空

建保二年九月十三夜月前嵐と云ことを

前大僧正慈円

月前の出入の山乃の嵐ふくに聖へる萩の上風

千五百番歌合に　お中納言定家

ひいまゆ人のゆ聖山ふを嵐に秋の月やもの

建仁元年八月十五夜歌合に聖月嵐冷

従京極摂政前太政大臣

いつくとを

秋の聖はもの小嵐くもりすくふ月もあるかな

嵐の中に

平宣時朝臣

やうへさ嵐をしのまに月ゆ聖へ秋風

従二位親子

風ふとて萩のうへ葉の嵐家ゆ月出る夜秋さしき

大僧正澄覚

さらら雲のはらきれ雲乃上てやとらを打き月の影

月乃影は袖とはいふとも

院御製

雲とみくわさらら月はたのうて出の影はをはよふ

深夜月と　　法一位教良女

雲ふくらかりかれをとはふ月影ふくはあさらふのやと

妹子中に　　前参議雅有

こゝろひとそ袖とおもはゆ月影は雲ふくて風そ身はしむ

寒治百首ゝ子よ潮月と

皇太后宮大夫俊成女

八月のうちや秋乃秋とうるあまと月よのりてや渡つらん

貞永元年八月十五夜家ゝ子合しゝ侍りし

よゝ山の月　　光明峯寺入道前摂政太政大臣

雲乃なかやわまとふ雲乃絶て沢ら出る秋の月け

家百ゝ子よ　　前大納言為家

海とゝ出てすれ忘の一松まとけもるゝすあ月乃

月子中に　　西行法師

月さゆるあ色の世ゝに風吹ゆ入てゝむ白波

稲原ゝ子ゝ月ゝ乃山とゝ入ゝ乃山とゝ入ゝ

坂境滅虎坂河八月十五夜家合り

雖波こ浪まと分てい月のなとけ物あ山陽
湖亀月と　入道おとな改大臣

ひ浪やこ風ふまて秋のあ月そこて
彩ふ知　前大僧正道孫

紀海や浪ちこふ海風よとを山まていろ月け
海亀月と云こと　お関大臣通

この夕やゆしみふとに風立て月乃出ぬの雲こ梅之
檜中納言實綱

りか出を月のよい為こ浪て焼ふこそを夜乃海へ

月こ中に　前参議為相女

こ紀出を山海の秋ふ秋ちこ浪ふこ月は新の白浪
海亀月の　坂鳥羽院御製

清見こ富士ま雪や雪えめ月新みこ乃海ふ
彩ふ知　西行法師

月出あい岩まて雲い出つむ雪欲こ梅風こ出て
花東為守

こ雲にやくちひて彩月の晴ま山ま新を出
大江義重

檜あてや松ふこ海つ海風よりあとこすあ月新

橘月と云しこと　右兵衛督雅孝

いそのかみふるの橋もくもりなき月をいくよすみぬらん

水の月　法中宮憲基

山りのをさまるかはみえわたる月まで白さ宇治の川なみ

正治百首に月をよめる中に　二條院讃岐

秋の夜の月の宿ふかし長月の雅を月やあくれあらん

永福門院中宮と申さる時歌の法西園寺ふ出仕を給りけるふ大納言三位門よさ[illegible]

よつらう者　入道おほ殿

法こう出雲の月をとの歌のやうをよませ給

ふ　法三位為子

すみのぼる秋の空の月をみるにつけて雲の月をみるにつけて

月をあはれとよませ給ける中に　今上御製

風の音を月はむしろの歌月ふきて先そ秋きぬ明

上東門院大宮に后宮と申ける時八月ら

お前よりお載らへ后を行て人てに云ふまゐせ

さ歌給ける時秋月さやかりとふとと

給ける　橘大納言長家

天津風雲ふきとじつゝ月のやどりをしらせけさまはつ雁の声

秋雲おなじくまもりはてゝ月入れりとをしへしと云

ふくとしみ給けり　貫之

あま雲はあふひをうつしとゝもみえぬ秋の月新そのゝ光

法性寺入道前官白家より月前そこゝろをよませ

給けるふ　摂政太政大臣

嵐風はあらしむるりも月新よ雲の衣いとせはしてあり

月五十首の中に　永福門院

秋風の彩をは松とゝもるに月は雲ゐのとゝ山ふく

月前風　左近大将實泰

ふるみのゝ月乃わらはは雲晴てゝ山ゝるゝ松風の

光ふ　九条左大臣女

山ゝの山ゝに接原はゝゝり光をよるゝ雲の月

平貞時朝臣三宿社にて雲一給ける五首

ふる中に　前大僧正源惠

世とゝ月のわらはは乃雲晴てゝ山ゝるゝ松風の月

月出ふる中に　法皇御製

あくるゝ山ゝ雲はゝゝ晴てゝ山ゝるゝ松風の月

章義門院

なゝあまし山ゝ雲はゝ我心雲はゝ月なゝく

八月十五夜月十五夜のよめさしけるふ

従二位親子

なのつゝもあはんをすまはりの月いまをてそみる秋

西治二年百首歌ありける時秋のうた

小侍従

なるあてを雅とうあはしの月はしをてに出れはあれ

百首歌中に　従二位家隆

海はしてそのうちの妹のよ月の光のうちふそをけり

月をみはけり　西行法師

人をみなうらの山の末まてにはもしん月の新とそ

前中納言定家

こう方はみな面新ようしいさあり月末てせ妹のよ月

院のこしなをとの中作　法のことを新とさ

とりて合　作　時月前懐旧と云

ことを　お大納言為兼

いつなりしの情ふいつるうてうかし秋のよ月

月前の中に

妹そうる月と空とは昔ますて新とはるうてみ

順徳院御時杜間月とをとをとを作け

前参議忠定

あかつきとなれば枝の梢より月ぞ物のあはれみえける

月ぞ中に　大江宗秀

煙とも思ふんを久しへ都の月よりそこふ

家は十ぞ三ぞ中に

白川院御製

世をしらしなふるいろん秋とも月いろ海せてそみる

守覺法親王家五十ぞ三ぞ中に

春とも秋とも思へ物の月いつくもあるあるん

鄙不知　西行法師

うらなみとうらいとしあるとも春の月となりてそのね

前中納言定家

なふるるも思ひ物の数とそなる　のちみる月の春とそなる

山里にて八月廿日はある月ぞ月いつく春

みく雨のはまもとんとそあるえ伯けまい

藤原孝標朝臣女

春ぞ人よみをうや山里は物のうそあるの月

山家秋月とうんを

後鳥羽院御製

紫の戸やはらをさうさみ人の月吹風はらくるの秋

五十ぞ三ぞ中に　お大僧正慈鎮

[illegible]

権大納言藤原朝臣　後深草院少将内侍

[illegible]

[illegible]　式子内親王

[illegible]

[illegible]　後成恩寺太政大臣

けつ月

道因法師

[illegible]

源師光家歌合

秋の月

従二位頼政

寛元二年九月十三夜月十三夜中に

西園寺入道前太政大臣

[illegible]

月の雲

[illegible]

僧正公朝

[illegible]

従二位澄博

[illegible]

[illegible]　後深院月

庭たづたづしうなりぬる月見やうの頃なれば新しき
法皇御所より五十首召しけるに月前
竹風　　前中納言定家

物思ひて月ながめつるたのもしの頃ひとりの竹の風
　　　　　　　　　　大江為言

妹のもとに月見ばやとおもひたちぬるに
ふけぬるにひとりおきゐたるあるじ
月とともに世をあかすなり　　法二条院御製

法二位歌合
　　　　　　　　　　お有馬門殿基房

物思ひて月をみるにねぬ月新しきすがたの月の姿
八月十五夜月十五首召人ふかき世にたぐ
ひなきかげかな　　院御製

あきをねぬとものうしろにおもひねぬ月より前にそそ
　　　　　　　　　　ふき

暁月

明けぬるかぎりの空の月の白しかげ月のつきに聖の
　　　　　　　　　　たちて
あかつきの月をながめけるに月

同白前左大臣

雲ひとつ破山形に若ふけてたちつ三かせる月そそ
　　　　　　　　　　て
月の中に　　権中納言公雅

月ぬる秋の松と吟分ていろこさみどりの色

前参議雅有

高のいろこみどりこさ山のこしてはつこさにうるあるこさ雲

廣田社歌合

曉よりぬやこさねらん小倉山麓のこすねよ月こさふこさ

建仁元年八月十五夜歌合に古寺残月と

いろこと

望太后宮大夫後成

ゆこさあこひあしこ山のこすこ寺松ばいりにる的月

月四方中に

前平門院

ここゆ宮光よ新清て澄ゆこりこあり明月

前大納言為家

小倉山こやこの宮ふのこそたこ残ばよのこる月け

曉月とふこと

平貞時朝臣

宮こ中こ宮ちこのこりて高の月ふこよる星秋

光こ

有家卿

月ふこ雲ふ月ふ新みえてこるこふりここふ秋

藤原定成卿

月乃月ふ新ふ雲ふみえて松風ここき梅の山こ

桂なこ面へこて明り伝こふ小倉山ここ月の人

よこ行こ伝

日乗太望太后宮大夫信実

[illegible]を含の山の月新乃入あり時の光ふりそそぐ

秋山寄中山　永福門院

夕嵐庭もさやけきまさきかつら木の葉おちて村雨そふる

雲ゝ間なる乃橋ふかくそ村雨ふる時の山ゝ

中務卿宗尊親王

風はゆく峯のうすくも雲ゝ晴て夕日ふかき村のむら雨

平時春

うすく降る夕立の雲ゝ晴て村雨の跡の山ゝ

今出河院樹中納言

晴ぬる青山路の忘れ近とゝふくゝとゝませ鳥けり

[illegible]ちそむる山ゝ雨晴て[illegible]ゝ雨の橋ふかく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]百[illegible]三[illegible]

前中納言後光

立こしらへをの雪ぬそのまゝにくりてゝる秋の雲

遠山雪　入道太政大臣

雪ふるそこにみえねとうけうすき月のかゝや姫山

雪中に　坂一条入道前関白太政大臣

秋雪ぬ白えまとこれいの物附日むしの器に付まり

そしとも物りとかえ物の雪しのこるをうすき紅の

百葉集ぬ[illegible]乃一句と[illegible]人[illegible]三つ[illegible]まり

けふふれぬ[illegible]に　後三位為子

[illegible]のゝ雪ぬ[illegible]乃聖の雪

雪　平政長

夕日[illegible]山のをゝ[illegible]ゝ雪に[illegible]つゝ秋の川波

寛治二年百[illegible]三[illegible]秋田

冷泉前太政大臣

[illegible]ふ[illegible]ぬ[illegible]ゝ[illegible]

前大[illegible]為教

[illegible]門[illegible]

亭子院御屏風

大中臣頼基朝臣

白雪乃たゝてのいはをとりてなり妹のそてこしぬゝ[illegible]

百番の内合　順徳院御製

妹と我ふるさとをこひわたる袖よりなれて[illegible]

秋萩乃こゝろと　前参議為相

庭の面ふる秋乃つゆき哀とそ[illegible]

第九　三月　内裏の内合　関持　[illegible]

光明寺殿入道前摂政[illegible]

ぬきあらす[illegible]の里[illegible]をしりしに[illegible]

雪中持花　権大納言信明卿

夕雪に乃こゝ[illegible]

秋の中に　二条法親王覚助

秋風ぬきさしふる里とゝ[illegible]の[illegible]

前右近大将家歌

ぬきゆけ[illegible]ふきこえつゝ[illegible]

持花　小弁

[illegible]

百首歌の中に　後二条院御製

今よりは[illegible]

賀茂社[illegible]　望月[illegible]　後成

月清き雲井より雲つたて秋のうたに歌うつせ

同人

平長時

久堅の月を秋さしよりもまして妹いふをねと歌うつ

源家清

色こそは秋さり衣ぬさとすと色にそ染めしそうつ

入道前太政大臣

いろこそは月乃宮居へ色こそ雨て十市はむ〳〵歌うつ

千五百番歌合小 殿

能朗入道前太政大臣

歌うつ三つの殿乃梅まつの〳〵こそあ〳〵は月乃宮に

百首歌中に

前中納言定家

時雨ゆくそら乃色ち枝よ風こえて〳〵こそ妹乃宮

杜鵑葉

前部に有歌

ちりゆくそ〳〵さ乃ちの下乃葉妹さにちとこの葉

長山院ちりめさしけり秋十首の歌中に

延政門院新大納言

せて〳〵山妹ちりぬすす乃葉さて〳〵ほの色そゆ〳〵さ

建保四〇内裏百番歌合

西園寺入道前太政大臣

色こそは秋乃山乃宮居ちりぬとも乃葉河あ〳〵ぬ乃ちこの秋入

秋歌

前大納言為氏

[illegible]

[illegible]

前中納言定家

[illegible]

九月十三夜の月の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

基俊

[illegible]

院新宰相

[illegible]

[illegible]

前大納言為家

秋の夜やこゝろ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後三条院御製

[illegible]

寛治二年百首歌奉りける時重陽宴

常盤井殿道のたまへる

菊

雲井にまがふ白菊

無邪心

百歳の大きやうの人のうゑたまへる白菊

菊

平安時

はるさめにぬれて菊のうつろひぬるかな

寛平菊合に田舞の酒の菊とよめる

みつのとの今はいかにたちぬらん

延喜御菊合

平希世卿

菊の花

天暦七年内裏菊合

中務

白菊のおもとつきなみけり

上東門院菊合

大弐三位

うゑそめしうつろふ色を初霜のおきまどはせる白菊

庭菊

前大僧正慈順

枝もなくもとをしもみえて菊のうゑし庭の白菊

建保内裏百首

お中納言定家

いこまやましも秋のあらふ嵐にひさかたの雲のうへにしらさ

百首の内中に　　後鳥羽院御製

山とりの雲はしるへのうすもみち紅葉ぬさとしてたむけ

紅葉をうとして　　従一位教良

そめやすらんみ室の山はとしをへて

権中納言兼季

嵐山乃みねのもみちはさそはれて

散ぬるかたもふかまほしの松の一本

みむろ山ふもとはあらしくふ河面分くる秋の夕風

従二位行能

秋雨や山とりそめんの時雨こそ

寛治百首の内中に　　杜紅葉

前大納言為氏

時雨ふりて秋のゝ鶉鳴ぬるかな

ゝ峯より伯けり河よりこ伯きて

慈道法親王

わたてふと紅葉をとゝやふらんの雨は秋の山さと

前大納言家

嵐にはあらひ山のもみちはなまてなまの鶉ぬれん

無品院伯よりまいけり河出前にて林葉紅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

年の始りみちと人のりとしつゝて侍る
を月ゝ　永福門院二条

紅葉は散りはてゝ雲のよりゆく
これをこそ思ひ出にしかの
散りはてゝ月すみのぼるそらの
光かな　近衛関白前右大臣

ひとへに苦しき世を古寺の
秋霜とふるとを　後二位為子

あはれなる夜の夢に恋の
歌頃なれ暮入物ゝその物

紅葉は散せぬ世にはあらぬ日を待合の
ゝそのひとりなれし後撰集へよりて
せられけゝ　月花門院

あるゝ山を言ふ紅葉を吹嵐の
堀河院は河百ゝ　ゝめられけゝ紅葉と
　澄源法師

滝の水の山の紅葉はこゝろ
なしゝを　権僧正雲雅

河ゆく水の紅葉は
光かな　貫之

[illegible]

[illegible]

中務卿具平親王

庭出水裏と云ふこと

前右兵衛督為教

秋ふかみあさちう庭の萩の葉もやはらかにして[illegible]

前三位宣子

庭もせにかへる[illegible]の時くるる秋の暮

暮秋の雲と[illegible]

[illegible]

権僧正覚円

なさるるむしてくるの下に萩ぬまいくるふる姿は

中原師宗朝臣

[illegible]ふるこころの出の[illegible]

西行法師

暮秋望

[illegible]

前大納言雅言

[illegible]

秋夕

[illegible]

遊義門院

[illegible]

城河院より百首をよませけるに時雨をよみ侍けるに

前中納言定房

花落て小野の山ぢの時雨にぞ紅葉の色ぞ深さ

野菅妹

聖人の尋ぬる庵の時雨に風吹みちて散もさそふ秋の嵐

静仁法親王

光りなす

宮のねぶるあさぢふに拾て初霜ぞ散もさ紅葉

武部の親王

蓮てゆく秋の名残の蓮しうは拾はり

家より百首をよませ侍けるに菅妹乃ぶんを

道二法親王賢性

妹が中に

雲の上聖山に本堂初しに紅葉を見て

前参議為相女

大方の月数のこゝろ常を木もこゝろ乃ふ紅葉を見て

為兼百首をよませ侍けるに時雨

権中納言兼季

妹が見やそこら川のこゝやせふ紅葉そゝるあけの空

順徳院御製

屋二百首をよませ侍ふ　二條院讃岐

長月の五日の月をながめて世の末とかこつのこころを
うたの神よりあたえたまへる月新の姫もいくそ宮治稽姫
菅姫月をよめる　　皇太后宮大夫俊成女

後光明峯寺前摂政太政大臣

ゆく秋の別をそへて長月の月はくもるなきかな
九月盡を後拾遺　　お開白太政大臣

きのふのこゝろをなほ忘れぬ人に秋をあはれとおもふ袖を
長月の月の最中今日ぞかはるなれとも秋やはてぬとおもふらん　　權中納言公雅

九月盡を萬葉せられけり
今上御製

ながらへて為の白菊折ふれは霜の形見とあすぞ見るらん
新元百首の時秋部
入道前太政大臣

菊未みぬあきをみはてぬ長月の霜にぞ姿をかへる
菅秋十首の時
前大納言為兼

ふりあてて菊未みぬ人をなほ霜のあとをとはんとおもふ
園融院の石山よりかへりて海辺をそらに九月

[illegible]殿上人[illegible]

けふ　前大納言公任

[illegible]

妹[illegible]

# 玉葉和歌集巻第六

冬部

久安六年崇徳院[illegible]百首[illegible]

時　藤原清輔朝臣

[illegible]

冬部中に　入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]

久[illegible]

久安百首[illegible]

前園院大臣家小大進

[illegible]

西行法師

閑居時雨

[illegible]

前中納言定家

百首の中に

[illegible]

後鳥羽院より五十首たてまつりける時

家隆

時雨つる[illegible]の下露[illegible]

後九条前内大臣

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院御製

山時雨とふるとのみ世[illegible]

冷泉前太政大臣

[illegible]

百首の中に

後鳥羽院御製

神無月時雨とふるゆく[illegible]

小弁

[illegible]

冬の空の中に　　太御門院御製

村雲の色えまくふ星のみえて時雨とうなる夜の嵐

むら雲はさえ渡の空よりはてて時雨るあけぬるかたもなしの

時雨とよみ侍けり　　刑部卿頼輔

長月のねぬ夜の空よりつる時雨光乃なりそめにけり

うらうらゆく雲まの空はれ日影ゆたかに時雨

　　従二位澄憲

うたあらの時雨いなそ色ぬるとつまとあるうれはよ松の末枯

　　慈道法親王

おもふ人の時をゆくへとふるり時雨よそひくふる激

冬の空の中に

　　心園法師

神無月ふるる雲をたなりてやとしをくれ空

　　正二位経朗

一村の時雨をはらふ色よりをくる雲のうらはゆく

五十番の合小時雨とこの世を侍けり

　　太宰大弐俊兼

久堅の雲花みえれおまて吹嵐乃ちよ時雨をそ雪

たなびくを

　　院御製

　　従二位家隆

おもひ浦なるふもとの浮雲もすさまじきやうに河面さびゆく

五百番歌合に　大納言有家

村雲乃はるかのいろ物思ふ面よりはるかに見渡

冬夕中に

なをあつ物思ふ人やとくすさのやはねをかはしてかはるらん

権大納言雅経

雲と月とは嵐の吹うきて立ぬ乃宮とゆく河面

永福門院百番歌合

嵐ふき木のもとちりふる雪に村雲さびし河面ふる道

前中納言定資

あつ乃宮乃木葉乃はるかに面影乃

前大納言為家

なをあつ乃宮乃木葉と吹よせて名をうもれ木乃

枯葉

法二位隆博

ちり乃こる枯乃乃葉それとだに見ぬ人と掃ぬ枯乃下

寛治百首奇可きりけり河面葉

前参議忠宣

うきとうつる落葉ふかの夕河面に落乃ふるやとも

持明院殿にて五十番歌合仙洞時雲

入道おほ臣政大臣

夕日はさすがに河面の一村は初しぐるる雲のけしき

前右大将

夕河面はしらるるねられ合ひふみてふる本業

権少僧都能信

人こそすゝの面いとてつてはるさ指はふる本業

冬ゝ中に河面

前中納言通房

紅葉ちる秋はれねの山は河面のとゝもとそふる

雨後落葉

お大僧正慈信

河面つるるねの雲いとしのさて風ちふる本業

前大僧正守覚

河面ゆゝわとゝ晴まふるとゝ本業ふりてふ嵐の風

百番ゝ合

順徳院御製

秋ゝ月嵐ふ河つゝ村面ふ紅て成本業

冬ゝ中

永陽門院少将

河面つゝゝ雪ふ降えふりて雪はくゝる雪ゝ方ゝ本

前関白左大臣

外面ゝなゝ紅葉相ゝ河面とゝゝる嵐ゝ

法皇憲實

雪ゝ風ゝ本業ふりてゝ河面とゝ紅とゝ紅

平宣時朝臣

さそふ嵐の色を今いのこすねはをくれて山風

　　彰子

　　壬生忠峯

紅葉ばのなかるる澤にすむ鶴の

　　西行法師

木枯のこのしたぶるる山里は

　　嵐の色ぞ

　　家隆卿

嵐吹く峯の紅葉ばちるとこそ

　　藤原定家朝臣

山ちかき雪のすがの水の紅葉せりとそおもふ

　　大井河遊覧

大井河遊覧の人ふねにてあり

　　俊頼朝臣

とりあへずちりなすものは人の門いでぬ木の葉なりけり

　　彰子

木の葉ちる宮の杉むらもりぬれば

　　惟明親王

　　後二條為子

うもれ木のうもれ木にいろそちる紅葉

　　前右近大將家歌

さそふ風は梢の風に吹ぬれど庭の木の葉ぞ散ぬ

　　平貞房

秋のこの紅葉ぞとうへ山の木枯にてこの物のあはれをみる

弘長百首に所ふる落葉と　常盤井入道前太政大臣

大井川秋の月をもとゝ　入江の月よりもとゝ

河落葉　法皇御製

富川ふるゝ木葉は山ゝ　ゝ行くそこ

彩とさそりて行くゝ　落葉埋みと

いふとも　右京大夫

あゝ木葉つもりまさりて　世間えて

落葉を　平宗盛

おちつもる木葉のゝ　せゝまえてゝ流

川の岩ふつゝる木葉　法一条入道前太政大臣

千五百番歌合に　惟明親王

嵐吹やそ宇治川の　流ゝ木葉ゝ　せ網代

彩ふ紅　人丸

みち葉をたゝす河　ゝ　ゝ

ゝふるゝてあるゝ　ゝ　ゝ

あまゝりのゝ　ゝ　ゝ

十月晦ゝ　ゝ　ゝ　菅原孝標朝臣女

風ふき吹こさりける所にまうでて侍りける
菊の葉に置ける露をかぞへて
と詠ける
弁乳母

神無月菊の葉に置ける露を
あいらす
見たる后宮大夫俊成

いまとなりては三日月のみちとりませうすかり
入道おほきおほきさき

神無月梢のもみち庭の菊枯のあるかなかはひとん
菊寓せしを侍けるに
延長御歌

秋ふかみ神無月にもなりぬれど
延長六年十月廿六日常寧殿の御前の菊
うへの御歌 伊勢のこ

さく菊をいかでかはこの世にもなかりけれ
今は昔の中に 朝平門院

菊のみぞ菊よりほかの色なりける
たち近中将道雅

聖へいさを藤いろの菊にそなへて
百首の中に 式子内親王

ひらさかやまのとりて菊にて

寒樹とよみ侍りける　従二位為子

[illegible]

霜乃いろ〳〵深るに朝ぼらけ　なりゆくかとも見えし

やうにて　僧正永縁

[illegible]

基俊

[illegible]

[illegible]

殷富門院大輔

月照草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同

前中納言定家

[illegible]

永福門院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

お大納言為兼

前右兵衛督為教

[illegible]

中務卿具平親王

[illegible]

賀茂社へ[illegible]

と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なみまくらにくちぬるかりのすがたかな

千鳥と旅行けり　中務宮貞親王

うら風のはしふきあまをつまくるまぼろも

鳳凰山をての破乃渡乃風さむしとふ女嶋

山のとをみえぬ岩乃渡乃まくれゆく月乃道

寛治二年百首歌　後渡御院御歌

後京極摂政前太政大臣

千鳥

ちどりなくひとりぬる人はなかるすまのとまやの秋の風

中務宮貞親王

権中納言長方

みよしの

ちどりなくなみ人しらす

後渡御院御歌

月清き山のよふけを山けいの渡の月の道

松のしたかけ

前参議修成

あらし吹せとの山風さむしつまとふ雁の声

ちどり

ちどりなくなみ人しらす

ふる

ちどりなくなみ人しらす

ふる

ちどりなくなみ人しらす

ふる

おほよしの舟にて満つらの浦千鳥　前大僧正道玄

今はしらせもしらしまの磯まの波小舟　津守國冬

もゝ波の引さいやつ重なるまゝ磯をゝ数の雪　法印源深

友原親盛家合よおもふんと

新舟こゝせこの三かあひよ月にえて波の磯に　勝命法師

関路千鳥と云と　平重時朝臣

清見ゝ寒の戸ゝゝ波風よ吹ゝゝけてゝ千鳥　前大納言為氏

波千鳥

風さむき松をあれ波乃はゝ三をゝ三ゝひの方しの　章義門院

今はゝ中に

家にえて新ゝ見ゝ今の新とゝ浦ゝ浦ゝ　武子内親王

猿沢池の墨ゝ新ゝけゝ四乃新よ面そ鳴

夕暮よ鶴乃新と

前参議雅有

ほらゝゝ四の面ゝ夕暮に山ゝ雪ゝ海ゝ

千五百番歌合に　従二位行政卿

初日はとかぬ乃ちへの子すがまく時やぬるらの河さき

氷と　　常盤井入道太政大臣

梅の河の入江乃ゆ氷とかさ波とよる舟の江あふとも

冬の中に　　前大納言為家

山川乃みなそこふかくむすぼれて流れぬ氷

河氷　　権中納言公雄

たゆたはぬ水とそなりて山川乃岩まくらにむすぼれ氷

百首の中に　　光明峯寺入道前太政大臣

はるの来る池乃玉藻はみなとけて水よりたちし波の下草

歌百首の中に　　二条院讃岐

滝川の岩ねつたふやこの世乃人をたのもしの

角ひとへうへいこそ乃ち河の面よりはるる本葉そ流

鄙ふ知　　九条右大臣女

はるの来る水ゆ上ふ乃ち鴨ゆ為てねぐらの岩とのやの

池の島とゆと　　平宗直

和あきれこそ乃ち波まの小舟高すの羽とそ乃ちしもさ池の樹

千五百番歌合ふ　　藤原雅経

関ハ世ふるのをくあすの川をのゝ社なるかいとのわ

冬ゝ山を　前大納言為兼

さゆる日ハ河ゑのなかのゝ山ゝよりすゑ吹おろして雲を時

雪の行あまをくみ給ける中に

河ゑ行くゝ山ハ星のさゆる夜ハ吉野の雪ハ秋ふかぬ　光明峯寺入道前太政大臣

秋をすゝ星ハ河ゑてゝ雲ハ吹うゝ雪ハ白雪　お春院實俊

河ゑ光ふ星ハ河ゑハひまゑゝてみゝ雪そゝやふりにけゝ　左近大将實泰

岩のゝへハ苔乃衣をゝうゝ　常盤井入道前太政大臣

鳥羽離宮花歌雪天とゝふゝを

雲ゑゆく行ゝさを見えて花ゑゝみ雪ハふゝの冬

冬ゝの中に　中務卿宗尊親王

とゝ雲ゝハ雪ゝ山ゝ花ゑゝて風乃をゝゑ雪ハ白雪

みゝゝ世ハなきわゝ雪乃ゝ尾上ゝ雪ハ　冬ゝ　後久世

朝雪　一条関白太政

[illegible]雲ハ晴れ朝日の日新よみて雲ハ山のて

山の雲を結給ふ　尚侍殿東頭子殿下

[illegible]ふ山ハ初て庭ハ[illegible]雲を

雲の中に　関白前太政大臣

ふりつる樹やとゝ[illegible]ふりあ[illegible]風を[illegible]ぬ杉の白雪

前参議雅賢

[illegible]ハ山の雲ハ[illegible]と同て雲ハ[illegible]ふて雪の朝

雪の[illegible]て[illegible]結給ふ　右大臣

[illegible]雲ハ[illegible]ふ[illegible]ふみて雪ハ白雪

前大納言為家

時ふり月日つもるかゝ[illegible]よ[illegible]ハ[illegible]よ[illegible]ふ[illegible]白雪

行路雪と云[illegible]　平貞時朝臣

[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]白雪

冬ゆゑ

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]白雪

前大納言為氏

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]白雪

雪の中に　太政

雪ふまゝハ山の[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

前中納言俊光

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]白雪

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ふ知　[illegible]中納言経平

たちこめるみねの雲はきえぬらんゆふ波たつる沖の白雪

前大納言家定

枝ならす梢は雪のふりつもりて木の下くらき杉の道

大納言有家

ふる雪の白雪ふるみ山の奥の庵

法眼俊院御歌

雪を袖にはらひつ

ゆく水のうつる木葉のひまもなくなほ白雪

前大僧正道洞

ふり消てこそあらまほしけれ白雪

三条右大臣家歌屏風

冬

雲のうへにさへぎりかねぬ月の山ふかき雪そふりつもるらん

前大僧正道洞

雪をさしりて人くるみちもなし

法印俊為

いとゝこそ

雪風はあらしの波とみだれ来て

前参議澄廉

同人

ゆくへなき浪路の雲はまがふらむ白き雪をとる

右兵衛督基氏

水鄉雪

蘆のうへに雪ふりかゝる雁鴨の入江さびしき波の上哉

中務卿宗尊親王

大井川をさきの蔦の紅葉を流す雲一むら

僧正實超

風ふく河の蔦の紅葉に吹りかゝる木葉の雲を落す

前大僧正仁澄

秋の嵐をしのぐ雲ゝ

入道前太宰中に　左衛門督公敏

ちぶ山や柏葉の紅葉ふかき森の梢よりはらふ雲

所首をめされし時連日雲とふこと

と

民部卿

下葉の竹ゝをはらへ袖そめ初てつゆ雲の数よ

暁雲と

晴よりやまぢの竹の雲ぬけて雲ぬけて

行雲と

前大納言伊平

吹ゝ嵐ふかゝる下ぶしの竹ゝ

みまとれ　雲よりの雲の雲の雲の

京極

ゆりつかうち聖の京極殿の花をさ　従二位澄博

雪消中に　前中納言為方

ふるとなくて散そつる庭の宿の白雪　友原貞綱

雪てをうつもふそそまくしの情の松の雪　お中納言資平

天川宿ふる雨の夕暮なるみのよりの白雪　藤原京綱

古寺の暁ふるとを

雲晴て風よりさ曉の月　前大納言為家

雪消中に

ゆう雪は雨ゆゆ日ふる消は雪ふれ新春の

雪は雨とふるを　延政門院新大納言

今朝のまは雪ハ消ゆ〻枯野のち菜の花

雪を　法皇御製

白雪はこゝろ内の冬ふる雪の内の春　（名所）

雪消て月の新春の庭の雪ふるすゝをふる梅　近衛関白前右大臣

消雪とふるを　従二位親子

はりうむ雲はてしなくみえつゝ消ゆくうそたゝ雲なり

雲耀作　　西行法師

雲うむ園の人丘竹花ぬれてねてうもむる村雨ぶ

月　　右兵衛督雅孝

てそつゝ垣根の竹もあまふりて雲に晴ゆく星の一むら

冬の空中に雲を　　院御製

星さゆる秋の空雲晴て吹とゝる風と消てゆく

月　　皇太后宮大夫俊成

雲ふまぬ人の為えまをりて古聖山もをゝ人の面影

俊成卿ゝ人ゝに問ふ事ありて世を捨けるふみ

雲ふまぬもをみよとやみ吉野の山松ゝえに雲の白雪

冬夜後鳥羽の院の御所乃ゝ雪ゝえ人の世界へ

のゝゝ小月雲ゝ出ゝ雲ゝ出ゝ雲ゝ出ゝ

月新い枯の梢よりふきそうす雪とうの庭

夜雪　　民部卿為兼

雪ふかくまさ〻新ふるて深つり雪の光よとをむ山の

前中納言資高

こゝろひまさ風吹ちえて消やすあ時うの雪にふりそさ

小弁

あまの戸の明ぬうちとみえつゝ浦り雪の光えつり

法性寺入道前関白右大臣より行けり時家

より百首ゝ歌よみ行けりふ雪と

皇太后宮大夫俊成

まれなる雪のきゝ乃家より雪ふまぬ人の家より昔物語ゝ

雪奇とて　　権大納言伝説

ゆりの葉ゝ深ふ雪ゝ降ゝ積ゝ乃家雪のあけ方の

建保四〇〇内裏ゝて遠村雪と云ことを

行けり　　前中納言定家

深ふ雪ゝ未踏の行れ雪なれとよすもや煙人ゝ行り

雪と

お内大臣

風ゝ吹梢ゝ月ゝ出ゝて雪ゝ積ゝ雪ゝ

冬ゝ月中に　　従二位為子

雪の夜あれひゝ雪ゝ深ふ雪ゝ積ゝ雪ゝ村雪ゝ月ゝ

[illegible]百[illegible]中より霧

民部卿[illegible]

[illegible]雲の[illegible]山[illegible]より雲[illegible]て霧[illegible]

入道前太政大臣

一村の雲より霧いでぬ[illegible]

左近中将為友

霧ふる雲のあえ間のくもりなく[illegible]

[illegible]中に

前大納言為家

嵐ふく[illegible]の[illegible]の篠[illegible]

お大納言為兼

[illegible]やすらへ八つ[illegible]雲に[illegible]せてくるさ[illegible]霧[illegible]

弘長百[illegible]より霧をよみ給ける

衣笠前内大臣

吹嵐[illegible]雲[illegible]

惟明親王家十五[illegible]

前中納言定家

[illegible]山の霧ふり[illegible]

寛元[illegible]五[illegible]宮[illegible]て給ける小[illegible]

今[illegible]五[illegible]月[illegible]

近衛前内大臣侍

九重にとどまるつゆの玉の月といつゝ見れん
禁中雪とゝつゝ　　菅原秀長

雲ゐ雪ゝ雪ゝ雪ゝ

書うつして　　法性寺入道前関白太政大臣

をのゝふ仏者の弟子と物うえと申す人の白毫

光をさしてうつしたてまつりし時分の本

とゝふこゝを　　前大納言為兼

本のゝふさむしの白毫を拝し奉て又めぐりあひ奉

ゝすゝりにまゐり物乃本より書れたりしを

毎日ゝ　　友京清正

物うえよわりてふゝむの白毫にさしのぞきて

仏名と称給ふ　　お大納言為兼

となへたる三世の仏をみるゝ事をもうの雲上人

感嘆ゝ

法性寺入道前関白太政大臣

もゝとせ分ふるふる嘆しきゝ

左京大夫藤原

ちゝゝて嘆ゝ　　常盤井入道前太政大臣

年をへて光をさらゆゝ法しりて一枝ゝにて

天慶四年三月四日裏御屏風ゝ

貫之

ゆく月日河のあさまあゝなるゝ世ゝ

法性寺入道前関白家より百年ゝ

伯けつふ歳蓋

なそもつ〜つりまい光とうつの蓋をいそうの後

右大臣

緬金

ひい五のこれ者ふ的そ志ゆ〜ふ〜ふ〜乃ら〜そ

前大納言藤為教

富中歳蓋

道ゆ〜ふりつむ蓋ふつめとを蓋ゆ〜ゆ〜ゆ

堀河院よ百そ〜ふ〜ゆ〜ゆ〜ふ〜ふ〜ゆ〜

伯けつ

京極前関白家肥後

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

後徳大寺左大臣

伯は住寺入道お冥白家よ百そ〜ふ〜ゆ〜ゆ〜

けつ中に歳蓋を　皇太后宮大夫俊成

衰なり数をつ〜ぬ光の月を行勇そをつり年ゆ

百そ伯ふ中に同ふを

院御製

年ふ〜ゆ〜ゆふの富宝ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

天慶三年閑ふ

乃蓋ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

と〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

屋風ふよ

里よ伯ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

ふるさとの人のいそうけよゆきふを
とどまりて思ひ出でぬ

紫式部

年ふるまゝに我世ゆく風のなかにんめらち
乃すさまじきかな

# 玉葉和歌集巻第七

賀歌

## 忠峯

ふるゝ

たかくかしこきいそのかみ世代のすゑを思ふ
はるかに

従一位倫子六十賀し給ふ時后三人ゐ給ひ
て女院御母藤原一二條関白左大臣

たかくかしこきいそのかみ世代とうとき行末をこそ
ふるまつ

## 権大納言ゐ成

めでたしさかふの宮の宮ゐ代やあまよりはるかに
大宮院西園寺にて従一位貞子九十賀給

せけるふ行幸三条行啓あるべきの
てんてう寺にまうけるの時
前内大臣
三ちりの三千ちをへてとき貴子世とかさねあ義世まさしき
祝部成仲九十賀しるきるふ行てつゝ
しけり　右京澄伝卿
老の波行末ちるるまと元ちる世と九十まさちれ深世
建仁三年京極殿にて松有義色とふとを
海せ〜も行ちるに六源入道前太政大臣
元ちる世のまちはあへいとれいるる松の子と世とけとそへちり

祝ゝを　郁芳門院安藝
万世と元ふゆ〜ん色あるそや苦むと景松と姿
小一條左大臣五十賀の屏風ちるそ人のよ
ませ行けるふ　右近大将道綱母
大元とめる月日のいてうとり未よあんそえ
親子関新王伊勢のいつきふく下を行
けるふ中納言廣明長奉送使そてり
中の河縁ふと行とそ人ちゝみ行ちに
順
神のます山ふ東乃露の子いちちる世ふ人ゝ

東二條院四十四賀屏風の詞

道濕

ひめこ松ちとせの陰へよる月を
正月七日わかなよ付て常盤井へ行ける
わかいまちかたのりへ行ふさしけり

月花門院

かすとり野の子日松よひまとて
ちとせつむとをわかなの
あつ〻ちす

徳舎女院

ちとせ経るかの姫ふるへて月とむとを
守覺法親王家より五十ちとせに
ちとせ

正二位季経

けふ
わか葉ちとせ松の緑よ
堀河院御時中文遊宴にて世経
て松久緑とふとと祈せ
後頼朝臣

松をなかめる宿の池
天暦御門生まれ
み仏
日とてにそふ今
出遊

参議伊衡

ちとせ百日乃松よ
百とせまて
延長御製

いとしつゝ海ゝ百年の春を経つゝ世の月をそなへ
延長七年十月元良親王宮家歌合に
しらけし河の屏風ふらせ作よりて
貫之
久しくも匂ふとそや梅の花色にのこれる咲そめぬ
延喜十九年十月貞信公宮家尚侍家
貫子朝臣のしらけし作をり時右大将保忠よ
ませける
ふりてふる宿の梅の花ゆゑ色にうつれる年を経
後冷泉院位よつゝ世を治ふ年の三月
南殿の桜はさらなりそてをみ作けり
出羽弁
風ふきて桜ちるさは春の世よ新の春のとそ思ふ
二條院位時花有喜亀といふことをよみ
作けり
皇太后宮大夫俊成
九重に匂ひそふる梅なれいく千年にあらんすらん
四元〻年三月太皇院西園寺にて一切経
供養せられを行ふに新書写写経を
をて筑紫にふとを講せし作り時よ
みけり
権中納言公宗

万世の色と咲ふりあかせて咲そふ花の色そ色さ
治兼乃法師賀茂社にて述懐の心を詠
伯けり
はつ〳〵ときと毎の色とそ彩つわ月末よ花や咲
四位二位三月鳥羽殿よ行幸ありて花
漆喜色とふふとを講せ〳〵し時
入道おたた后
橘花の匂ひとひとして昔なあつる色や嬉き
位よ花ましく時禁庭花盛久とふ
ことを〳〵伝ふ〳〵まつり〳〵次り

雲の〳〵九重よりやとの乃庭風を三〳〵ねもそのとき
後深草院伝法時彩の盛よ上皇新殿入
まつ伝ふ〳〵まつり者と思らんせ〳〵し仏ゆ世さて
しめして松枝よ問りと付て年〳〵せ沿そむ
ふと付ひを沿ふ 後嵯峨院御製
吹風も松ふ問り小雪元ふ毎の子せ乃枝分ふそふ
伝返 後深草院弁内侍
うそ〳〵なさ毎のあまりよ伝ふ枝ふ者ふそふ
関白小将ふそふ乃ひ中伝けり次の日前雪

[illegible]

前大納言為氏

[illegible]

[illegible]

左近中將為春

中納言行平家[illegible]

小倉百人一首[illegible]

[illegible]

五条業平朝臣

延喜六年内裏にて[illegible]

[illegible]

大僧

百敷よりはるかにて菊の花をみる[illegible]

[illegible]

前大納言公任

[illegible]

兼保二年四月清涼殿にて久[illegible]月と

云ふことを侍せてしけるなり

白河院御製

ちぢのあきをさそふるき月影のやどる世をとはるをけ

建久五年八月中宮内方にて月契秋久を

云ふことを侍けるに　正二位季経

雲かくれいく方代のあるもつきはなをてる秋の夜人

建保二年七月内合ふ

後二位行能

のこりなる世をあはれとなれはてしひかりの物の舟

同六年八月十五夜中殿にて池月久明

はいふことを侍せてしけるなり　前大納言為家

雲のよりひとりはなれて秋の月やどる池をもとはるを

後鳥羽院にて八月十五夜月契多秋と

云ふことを　法花山院内大臣

ちぢとも小雲をもとむるをかあるてる月の方世の秋

正治二年院百首に百首なりけるに

祝のこころを　二条院讃岐

ちぢのあきをてはいのちをかぎりあるさかの数をかぞへ

皇太后宮大夫俊成

武樣とうの松をうえ給へる所にて
堀河院御時家うたの
の琴ひき給けるをきゝ給てよみ給ふ
二條太皇太后宮大貳

琴の音にまがふ松風ふきてこそしらべ
ものとなれ給ふ御法性寺入道関白殿
人〻ふかう思給ける歌数多とゝ
と

和琴の音にまがふ松風ふきてこそしらべ
ものとなれ給ふ

関白前太政大臣

行あまの釣舟はてしなしと思
家社祝

前僧正公尊

角のむすび神をうゝをひけみめふいなりの山の
岩松祝と云ことを

平時廣

行末の長き世代をこゝ海の昔いまの世代をこゝの松
松深栄亀と云ことを

前大納言師重

万代と君を祈りて松うえ初ふかき緑を色そへ
ぬらす

お大僧正禪助

ひとへに行末とゝ彩ふ竹はそのふかき世とゝ重て
建長三年住の江の御幸給ふ時よみ給
けり

関白道家公

老らくの我身と松と世とへてこゝろの世をかさね

山路の苔よ松竹の十りとおいて行くを流
いまゝみ元家とやけり時生りとして
前関白太政大臣
角のかさ元つ子と世乃十りてもおいそふ松の根よりあん
守覚法親王家五十之三月中に祝乃ゝと
講行けり
望月后宮大夫俊成
元つ世ゝ年の聖の山井乃宮あきんのゝ結ふあて
宮内卿祝とゝふとゝとゝ行けり
院御製
世ゝ年ゝ山つきて乃ゝ行へ面五ゝ蔦乃紅ゝて

建長五年七月三ゝ三ゝ三ゝ三ゝ行けり時述懷
乃ゝを
山消入道前太政
元つ年ゝ世ゝ八千代の末まてを我身乃ゝ寿つゝ
重生法師八十賀し行ゝ乃ゝふ読て行けり
前右兵衛督為教
ゝけり
始りゝ世ゝ八十代とゝ
宮内卿祝と云とを
法印栄尊
天津空星乃位とゝ
恒明親王生れ給ゝ始めて七夕の祝ゝ行て
読行けり
賀茂在藤朝臣

元亨元年七月八日より出家して八百余世を祈りをなす
二條院の御中宮御方の御合わせとして
清涼殿御所殿上ゆるさるる侍ける
太宰大弐重家
和歌所より召して侍ける雲のかの者の
今上の御即位の時大納言三位と
つとめて上洛して侍ける
入道お太政大臣
あるべき雲のようりとうとしてのかみ
太政官より召して侍ける別当惟方大弐藤
よみ侍ける侍ける
前大納言光親
いまはをもひとりのこし我宿ふかくとつるの松の陰
正慈元年世御入内の時よみ侍ける
従三位為子
今をかぎり月日光てめぐりあう雲のかぶるまんすん
千載集奏覧の時いまとく侍ける和歌
あ〜てふうさうけける事
皇太后宮大夫俊成
和歌所より召して玉藻とうさつめて万代をもえらみん

文永二年三月續古今集竟宴ありしを
始めとして世代々々勅撰
三世まで小倉山今もなほ
天慶九年大嘗会悠紀方近江國稲春
郡　　後撰集御製
　　読人しらず
あふみなる勢多の唐橋ふりぬれど
　　世の中の人の光をぞ
　　見る
嘉保元年大嘗会主基方山城村
　　前中納言匡房
やまとなる初瀬の山の桜花
　　ちりぬべきかな
康治元年大嘗会悠紀方風俗和琴
　　唐人
　　楽急長示山　　左京大夫顕輔
　　元久世代の岩根松ふるしやく　　新しきまて
　　同御屏風哥　小倉山　村
　　元久世代民のなりはひ
　　仁安元年大嘗会悠紀方己日楽急末
　　綿蘭　　皇太后宮大夫俊成
　　ゆふ日の日影ながらにてたのもしの
　　貞応元年大嘗会主基方屏風備中國
　　ひのさかりの山　　前中納言頼資
　　初河ふりはてしかあすもまたかの

寛元四〇大嵩今惣紀方近江國三日示
破孫寺山　　お中納言經光

元亨二年四月日乃おそはけき元とそのふく海の
永仁六年大嵩今惣紀方出羽風近江國平
枝村友紀淺深　　前中納言俊光

ふるさとの花もさかりを盛とく久しく万代の春
延慶二年大嵩今惣紀方稲春寺を以
國暗郡里とゝめ
いまゝ小今とゝ物の里人世にこえあらはれ
はるとなけく